

(3)
蘇聯
之
部

F-0069

0:00

4 收到

通商局

第一課

昭和參年壹月拾九日接受

公第
五五三
號

昭和貳年十二月貳拾日

山
上
高
山
上
高

47

在オデツサ

領事島田

在オベッサ
日古國
金事

外務大臣岡田外郎

オデの甘巻、鮎氷、岡の報告、件

去年冬ハ南露一般ハ少錫、高加ナク、不雨、
 一、倒年、ミ、空氣早目、ナリ、其結果實
 海、アストラハ、港、砂、近、コ、ハ、多数、隠、船、去、候、
 低、氷、着、テ、帰、還、ス、ル、下、鉄、ハ、カ、ハ、少、キ、ト、候、ハ、物、ハ、

在オデツサ日本帝國領事館

[illegible]

在オデツサ日本帝國領事館

通商局
昭和三年三月六日 接受

公第五一號

昭和三年貳月拾日

山ノ下

在オデッサ

榎本ヲサ
日本帝國
領事

領事島田 滋

外務大臣岡田 啓介 殿

フエアドンヤ附近航海
用鎖錠二箇を件

最近 クリスマス、フエアドンヤ港附近、海面に氷
雷敷散せし其の爲、商船、航行不能
船を三隻トヤ、外國船舶、同様に、停泊せし

在オデッサ日本帝國領事館

又、最近、在オデッサ、海面に氷
雷敷散せし其の爲、商船、航行不能
船を三隻トヤ、外國船舶、同様に、停泊せし
又、最近、在オデッサ、海面に氷
雷敷散せし其の爲、商船、航行不能
船を三隻トヤ、外國船舶、同様に、停泊せし

在オデッサ日本帝國領事館

381

結氷、見たりが、幸、ニシテ相当強力なる砕氷船、リットゲヤ号、*リットゲヤ*、ナル、リッ、ガ、入、流、船、全部之、砕氷、先、事、カ、リ、ン、辛、フ、ン、船、船、大、支、障、ナ、カ、ラ、メ、タ、リ、然、レ、二、週、同、運、ガ、ン、九、砕、氷、船、ハ、要、斯、科、ヲ、ノ、電、命、ニ、基、テ、二、フ、ラ、エ、ラ、港、ニ、航、同、港、附、近、に、航、砕、氷、ニ、従、事、ス、ル、ナ、リ、一、時、オ、デ、ッ、サ、港、に、引、上、タ、リ、ガ、ハ、岸、港、者、大、ノ、船、船、ハ、少、ク、方、法、ヲ、失、ヒ、来、航、先、流、船、ハ、何、レ、ノ、海、上、遠、ク、氷、厚、外、に、任、由、ニ、中、ノ、数、日、に、及、ハ、ナ、リ、又、甚、カ、ハ、食、料、品、ノ、窮、乏、ス、ル、事、電、報、ニ、基、テ、ス、ル、ナ、リ、又、出、航、船、ハ、多、ク、ナ、リ、増、テ、銀、ヲ、融、融、ハ、ス、ル、水、形、ノ、港、内、同、砕、氷、船、ハ、ア、ン、何、レ、ノ、砕、氷、船、自、身、

12

海外經濟事情掲載済		32
昭和4年4月15日		
第213号		

通商局

公第 〃 九 號

昭和四年四月拾八日

在オデッサ

領事島田 滋

外務大臣男爵田中新一殿

オデッサ港、結氷状況

報光ノ件

二月初、以降極度零下二十五度、漸下、二週同以上結氷シタル当地ノ寒氣、結果、港内、白、粉、港、外、十、里、ノ、遠、距離、ニ、及、リ

昭和四年参月廿五日接受

10
43
Sc

通商局

公第 五 號

昭和四年三月二日

在オデツサ

領事島田滋



外務大臣岡田中島一廣

才力に力を面船船出入困難

狀況報告

レニシテト陸地迄、おツ凍結を以テ内外船
船より石炭を運ビ碎氷船五ツ外一隻
、氷炭を積シテ氷船、用ヲ得タル由ハ

671.156

[illegible]

送電石万銀したる計、難い。お安々感。せん
何としかいふ。非、船、努力、修、辛、之、
随、之、足、之、如、
随、之、敗、敷、同、同、吾、之、停、船、味、之、マ、ア、リ、船
船、同、係、者、之、業、之、操、業、之、甚、大、之、
ハ、ロ、ト、田、之、マ、ア、リ、
目、下、ノ、天、候、之、ハ、理、情、之、由、之、進、歩、之、ハ、余
程、之、憂、化、之、ハ、限、之、航、行、ノ、安、全、之、ハ、何、時、頃、之、ハ、
其、際、之、ハ、難、之、
其、報、告、之、ハ、

CH

昭和四年六月廿四日接覽

公
第
一
號

昭和四年五月廿四日

オデッサ

領事烏田



外務大臣 芳澤 田中義一 殿

レーシングロード 航海開始

二 閱 報 告 件

芳蘭港の四月下旬より解氷期に入り、五月中旬以降全う
 航行自由となりタルトフロ本月二十一日レーニンググランド
 発電に依り、全日ラ以テ、港の本年度、夏期航行
 を開始シタル趣ナリ。最近三十ヶ年間に統計に依りハ

671,156

レーニングラード港ニ於テ通航開始ハ一九一〇年
 四月八日最モ早ク（一九二〇年ニハ四月三日ニ通航シタ
 ルモ華實貨物ノ取扱皆無ナリシヲ以テ之ヲ除外ス）一九一
 九年ノ五月十一日最モ遅キシト為リ可ク普通四月ニ
 十五日ヲ以テ標準トス。本年ハ普通ノ年ニ比シ約一ケ
 月モ開航遅レタルカモ近々見サレ寒氣ニ福セラレ
 タルモノニシテ今年度、^迄通航用計劃遂行ハ多大ノ困
 難ヲ来ス可シト予想セラレ。即チ本年ニ於テハ昨年ニ
 比シハ五ノ一ノ荷役ヲ増加セシメタリトシ多數ノ木材ノ
 輸送ヲ計劃シ居ルモ既ニ開航ニ於テ一ヶ月遅延シタ
 ル以上冬期結氷期ノ到来時ニ遅レサル限リ所定ノ作
 業ヲ遂行スルニトモ甚タ無理ナリト見ル可シ
 航行開始ト考メ外船舶ノ乗往スルヲ常トシ本年モ其

日二十一日南苑多日ニ於テ
来由中ナル旨報ニ付テリ
右御参考迄報告ス

CH

F-0069

0:28

海防経済事情

6-71-156

文書課發送 昭和參年七月 參日發送済		淨書	正校(原稿)	(中號川紙)
主 任 主 任 第二課		昭和參年七月	附屬書	通
管 主 通商局長 了				
受 信 海軍省米水路部長 宛				
人 名 逋信省官峯官船局長				
件 名	レーニングラード港航行開始ニ関シ報告ノ件	發 信 人 名	武富通商局長	
本 件 ニ 關 シ 今 般 在 オ デ フ サ 島 田 氏 ヨ リ 別 紙 寫 ノ		名 込 級		
通 報 告 ア リ タ ル ニ 付 爲 御 參 考 右 茲 ニ 送 付 ス				
(昭和參年五月二十日附在オデフサ島田氏第一八號寫並附屬書寫作成ノ上ニ添付ノコト)				
公 信 案	外 務 省			

公 信 案

別紙

タラシムル目的ヲ以テ倉庫及専属波止場取付方ニ
 対在當地ハ聯邦通商代表部ハ十二月以來當國
 大蔵省ト交渉シ同者ニ於テハ右ハ聯邦ノ所要ヲ
 満タスニ必要ノ措置ヲ執リタル趣傳ハレ居リタルカ
 一月二日ノヤサカス、ジノス紙及ソケアルデモクラソソ
 紙ハ聯邦ノ北方港ト西欧ヲ聯絡シ居リタルソグ
 トルグフロトノ船舶十五隻カ一月中リガ港ニ週
 附セラル、ニ呈ル可キ旨ヲ報シ過去最近ノ六ヶ月間
 ニ於テハ聯邦貨物ノ通過ハ一日百乃至百二十貨車
 ニ達シ居ルモ右ノ如クソグトルグフロトノ西欧ニ対スル
 航海ノ根據地カリガ港トナル際ニハ聯邦貨物ノ
 通過ハ一日二百五十乃至三百貨車ニ増加ス(ストノ
 期待ヲ述ヘ居レリ)

670K, 1561

機密公第一聯

昭和五年一月六日

在ラトヴィア

臨時代理公使 杉下祐次郎

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

リガニ聯邦船舶ノ冬期根據地
 穀定ノ件 稟結

聯邦船舶ノ北方港據地ノ場合ニ対シリガ港ヲソ
 聯邦船舶ノ西欧トノ間ニ於ケル航海及運送ノ根據

而して前記十五隻ノ船舶ニ付テハ内五隻ハハン
 ルグ及ロンドントノ航路、四隻ハバルトノ航路、三
 隻ハルアーガルトノ航路ニ充テラレ残り三隻ハ神充
 船トセラル、趣ナルカ尚通過貨物ノ増加ニ対スル期
 待ニ關シテハウクトコロニ依レハ当地取引所関係者
 ニ於テハハノ聯邦ヨリノ通過ハ同聯邦ノ輸出ノ現狀ニ
 顧ミ余リ大ナル増加ヲ期待シ得ス寧ロ向題ハハノ
 聯邦ニ對シテノ通過ニシテハ聯邦ノ外國ニ於テ買
 入レタリト傳ヘラレ、大量ノ綿ノリバウ及リカ經由
 ハノ聯邦ヘノ輸送カ頗ニ云為セラレ居ル次第ナルニ
 綿ニ付テハ十二月米ノ聯邦ヨリ輸出ノ為メトルギス
 タン綿カリバウニ送付セラレタリ（十二月十八日、ラトウ
 正紙ニ依レハ通商代表部ハ綿ノ置場トシテリバウ

CII

貨車停車場ニ三個ノ倉庫ヲ借入レタル趣ナリ）ハ
 聯邦ヨリノ綿ノ通過ハ從來之ヲ見サリトコロナルニ
 ハノ聯邦トミテハ輸出ヲ強行セサルヘカサル關係ニ
 アリ綿ノ如キハ自國織物業ノ原料トシテ殊ニ缺乏
 ナリ、此ノ點ニ拘ハラスハノ聯邦ハ猶之ヲ輸出セシト
 シ居ルモノナルヲ以テハノ聯邦ヘノ輸入綿ノ通過ノ如キ
 ハ向題トナラスト焉シ居レル由ニ付南ハノ儘所記
 ス

CII

（右報告ス）

（本信留送付先

在露大使

海外經濟事情

敗氷馬

分類F門/類5項0目6
收藏番號(670K.1561)

収

2.

文書課長	昭和五年	參月參日	發信	正校(原稿)	(甲號用紙)
文書課發送	昭和五年	參月參日	淨書	正校(原稿)	(淨書)
主 管	通商局長	3	主 任	(起草昭和五年二月二十八日)	
機 密	第一	五	號	昭和五年參月參日	附 屬 書
受 信	人 名	武島通商局長	發 信	人 名	武島通商局長
件 名	「リガ」ニ「ソ」聯邦船舶ノ冬期根據地 決定ノ件	達 名	綴 各 國 船 隻 運 送 手 続 等 手 続 手 続	達 名	綴 各 國 船 隻 運 送 手 続 等 手 続 手 続
本件ニ關シ今般在「ラトヴィア」移下代理公使ヨリ別紙寫ノ					
通報告アリタルニ付爲御參考右茲ニ送付ス					
(昭和五年一月六日附在「ラトヴィア」館來(往)第一號寫並附屬書寫其儘添付ノコト)					
公 信 案	外 務 省				

3 4

F-0069

0132

通商局

第二

各國航空航路表
昭和五年四月一日
BII

公第一一七號

昭和五年三月二十一日

在ソヴィエト聯邦

特命全權大使 田 中 都 吉

外務大臣男爵 幣 原 喜 重 郎 殿

蘇聯邦ノ海運ノ統一ニ關シ報告ノ件

本件ニ關シテハ客年八月十日附公第二九五號ヲ以テ報告申進置キタル
處今般勞働國防會議ノ決定ニ基キ河川及海上用船舶ハ交通人民委員部
ニ移管セラルルコト、ナリタルカ右ニ關シ二十一日ノエコノミーチ
テエスカヤー、ジーズニ紙々（交通人民委員部機關紙）ハ左記ゾオフ
氏ノ會見談ヲ掲載セルニ付右報告ス

BII

勞働國防會議ノ決定ニ依レハ各種ノ國營機關及コーペラチヴ所屬
ノ海上及河川用船舶ハ交通人民委員部ノ機關即チ河川船舶株式會
社及ソヴドルグフロツトニ移管セラレツツアリ同決定ハ單ニ交通
上ノミナラス國民經濟上極メテ重要ナルモノナリ河川交通ハ極メ
テ迅速ニ増加發展シツツアルカ最近數年間蘇聯邦ノ製造工業ニ於
テ注文シタル船舶ヲ供給スルコトヲ得サリシカ故ニ船舶特ニ河川
用船舶ノ噸數ハ増加セスシテ終リタルヲ以テ來ルヘキ航海季節ニ
於テハ各航路ハ何レモ其ノ利用シ得ヘキ船舶ヲ合理的ニ使用セサ
ルヘカラス
國營機關及コーペラチヴノ船舶ヲ交通人民委員部ニ移管スルコト
ハ顯著ナル合理化ノ措置ナリ商船ノ集中ハ船舶噸數ノ運用ヲ集中
シテ運輸上最モ有效ナル方法ニ依ツテ船舶ヲ使用シ又各種機關ノ
間ニ於ケル有害ナル競争ヲ中止セシメ得ヘシ
現在海上及河川用船舶ノ大部分ハ各種ノトラスト、工場、漁業及

F-0069

木材機關、コイペラチヴ等ニ屬セリ完全ナル統計ニアラスト雖モ
セヴェルザツブ、レツサ（西北木材）ノミニテモ二十七隻ノ蒸汽
船ト蒸汽船以外ノ船舶七百十五隻ヲ有シ又カール、レツサ（カ
ール自治共和國木材）ハ各種ノ船舶百六十五隻、トレプトレス
ト（木材トラスト）ハ同七十九隻セヴェロレツサ（北部木材）ノ
北方流域ニ於テハ八十隻ノ蒸汽船ト同數ノ帆船、ヴォルガ及裏海
ノ漁業トラストハ百六十一隻、チエントロサユースハ十四隻ノ汽
船ト三十九隻ノ帆船、ウラル、ゴストルグハ十六隻ノ蒸汽船及モ
ーター船、ドネプロストロイハ二十五隻ノ汽船ト七十三隻ノ帆船
スホン工場ハ百六隻ノ各種船舶、ルスノルヴエゴ、レツス（那威
トノ木材合辦會社）ハ六十五隻ヲ有セルカ其ノ他石油シンジケー
ト、カムチャツカ會社、國營漁業、ユーゴースタリイ。ダリイ、
ゴストルグ、極東林業、クリミヤ鹽トラスト等モ夫々海上航行用
船舶ヲ保有ス

B11

今期ノ航行季節ノ開始ニ際シテハ總テノ商船ハ各種ノ河川及海上
航路ニ配置セラレヘク而シテ國營機關及コイペラチヴハ單ニ其ノ
内部ノ需要ニ必要ナル汽船ノミヲ保有スルコトナルヘシ又原始
的流木方法ノ行ハレ居ル箇所ノ筏ノ曳航其ノ他些細ナル雜業ヲ除
キ總テノ流木事業ハ汽船會社ノ手ニ依ツテ行ハルヘシ
現在内外ニ於テ建造又ハ修繕中ノ船舶ハ四月一日迄ニハ各航路ニ
移サルヘシ而シテ交通人民委員部ハ從來移管セル船舶カ所屬セル
機關ニ屬スル積荷ニ付テハ之ヲ割引シタル運賃率ニテ輸送スル義
務ヲ負フモノニシテ^{同引}下運賃率ハ五月一日迄ニ發表セラレヘシ

B11

公第一九〇號
昭和五年五月五日
在ソヴィエト聯邦
特命全權大使 田 中 都
外務大臣男爵 幣 原 喜 重 郎 殿

蘇聯邦ノ海運ノ統一ニ關スル件
本件ニ關シテハ本年三月二十一日附公第一一七號ヲ以テ報告シ置キ
タル處右ニ關聯シ海上及河川運輸管理部ノ改組ニ關スル中執委員會
及人民委員會議ノ決定別紙譯文ノ通りニ付右報告ス

各社航運業協會報告雜覽

海外經濟事情

分類 F15.0.6)

收蔵番號 (F15.0.6)

文書課發送	昭和五年四月十九日	淨書	(吉井)	正校	主稿	主稿	主稿
主 通商局長	任 主	第二課	五年四月十五日	附屬書	通		
受信	通信官事務局長	發信	郵政通商局長				
人名	港務協會々長 水野錦太郎	人名					
件名	蘇聯邦ノ海運統一ニ	名 込 綴					
本件ニ關シ今般在蘇聯邦帝國大使館ヨリ別紙寫ノ							
通報告アリタルニ付爲御參考右茲ニ送付ス							
(昭和五年五月五日) 日附在蘇聯大使館來信(社)第二(一)號寫(附屬書)送付ノコト							
公 信 案							
外 務 省							

文書課長 公 信 案

別紙

(甲 號 用 紙)

海上及河川運輸管理部改組ニ關スル

中執委員會及人民委員會議ノ決定

聯邦中執委員會及人民委員會議ハ左ノ通決定ス

一、經濟的基礎ニ立テ經營セラルル全聯邦海上及河川運輸合同ヲ
交通人民委員部ノ所管トス

二、全聯邦海上運輸合同ニ左ノ通移管ス

イ、「レーニングラード」港ヲ含ム全海商港ヲ其所屬財産ト共ニ

ロ、一九三〇年一月一日ノ現在高ニ依ル「ソフトルグフロート」
及「ゴスカスパール」兩株式會社ノ全資産及負債

三、全聯邦河川運輸合同ニ左ノ通移管ス

イ、交通人民委員部所管ノ河川船舶

ロ、内國水路管理部所管ノ全財産

四、全聯邦海上及河川運輸合同ヲシテ諸汽船會社及其ノ所屬事業ノ
財産ノ管理及使用、新規汽船會社及其ノ他事業ノ組織並當該運輸
部門ノ大（資本的）建設ヲ指導セシム

BII

五、全聯邦海上及河川運輸合同ハソヴィエト聯邦人民委員會議ノ確
認セル定款ニ基キテ行動ス

六、海上及河川ノ運輸ヲ交通人民委員部ニ委任シ同部委員代理ノ一
人ヲシテ指導セシム

七、本決定ヨリ生スル現行法律ノ變更ニ對シ聯邦人民委員會議ノ確
認ヲ得ル爲一ヶ月内ニ同會議ヘ提出スル様交通人民委員部ニ委任
ス

聯邦中執委員會議長 カリーニン

聯邦人民委員會議長 ルキコフ

聯邦中執委員會書記 エヌキーゼ

一九三〇年二月十三日

莫斯科 クレムリ

BII

(分類 F150.6)

(票合照)

普通 第三九九 號

昭和 五年 十二月 二十六 日

發信者 在ハ、合フス

總領事館事務處理 村瀬悌二

受信者 外務大臣 幣原喜重郎 殿

件名 極東於在明年度河運輸大發展計畫之件

原書ハ F150.314
海運政策係件
蘇聯之部

ニ在リ

記録件名 極東河運輸大發展計畫之件
昭和五年

F-0069

0130

通商局

普通第四二號

昭和六年二月九日

在ハバロフスク

總領事代理 小柳 雪

生

外務大臣男爵 幣 原 喜 重 郎 殿

太平洋「ソ」側商船隊ノ大擴張ニ關シ報告ノ件

本件ニ關シテハ各報二十一日附普通第三九九號拙信ヲ以テ報告申進
直ニタル處本九日發刊當地報執委會機關紙ハ本件ハ今般莫斯科ニ
於テ最終的ニ決定セラレ本年航海季ニハ「ソ」聯邦各海ヨリ極東ニ

發給場

昭和六年二月九日

別紙

BI

向ケ汽船十六隻（此ノ噸數五萬八千噸）補充廻送セラルル旨報シ居
レルニ付右何等御參考迄別紙ノ通譯報申進ス

本信寫送附先

在蘇聯邦大使
在滿洲總領事

BII

F-0069

0:38

太平洋商船隊ノ船腹大擴張決定

太平洋商船隊ノ補充問題ハ今般中央ニ於テ最終的ニ決定シタ而シテ
 極東ニハ他海ヨリ積載量各六千噸ヲ有スル「ドネブロストロイ」號
 級貨物船五隻ノ外「シミツド」號（二千四百噸）「クラーヌスイ
 オクテヤーブリ」號（四千五百噸）「セルブ」號（千噸）「モロト」
 號（千噸）ノ貨物船四隻並ニ「クレチヨト」號（十七百五十噸）及
 「ソヴィエト」號（十七百五十噸）ノ客船二隻ガ廻送サルル筈デア
 ル
 右ノ内「クレチヨト」號ハ急行北樺太^航船路用又「ソヴィエト」號ハ
 堪察加航路用トシテ隊定サレテ居ル右二隻ハ各々乗客三百人ノ乗船
 可能デアル以上ノ各汽船ハ本年四月迄ニ浦潮ニ來航スベクソシテ直

BII

チニ就航スル筈デアル目下「ソヴィエト」號「シヤシ^ストロイ」號
 及「シヤトルストロイ」號ハ既ニ太平洋同出帆シ其ノ他ノ汽船モ最
 近出帆スル筈デアル

BII

前記汽船ノ外「バルチック」海ノ航行開始後ニハ特ニ極東専用トシ
 テ「バルチック」造船所ニ於テ積裝サレタ「セーウェル」號「スー
 チヤン」號「サハリン」號及「アナドイリ」號ノ四汽船ガ極東ニ出
 發スル筈デアル石汽船ハ各々貨物積載量二十七日五十噸ヲ有シ乗客
 三百四十名ガ乗船出來ル様建造サレテアル
 此ノ如ク太平洋商船隊ハ汽船十六隻其ノ積載量約五萬八千噸ノ大補
 充ヲ受ケ右補充ハ從來極東ニ存セシ全商船隊ノ積載量ヲ遙カニ超過
 スルノデアアル

新航路即チ北緯八度及南緯八度
レタ
航行客船航行表ニ於テ確認サ

BII

F-0069

0140

極東地方ニ於ケル運輸業ノ現狀

交通人民委員部極東地方全權代理「ザレンボウ」

廣漠タル面積ヲ擁スル極東地方ニ於ケル運輸機關ノ意義ハ頗ル大デアル此ノ事實ハ堪察州「サハレン」ノ如キ地域ノ發展問題ガ現在文字通運輸通信問題ニ限ラレテ平ルコトヲ^{以テ見テモ}充分デアル地方人民經濟ノ「微々タル」地位ヲ占ムル運輸業ニ今ヤ特別ノ注意ト關心ヲ特タネバナラナイ

此處數年間ニ海運貨物ハ著シク増大シタ戰前ノ記録的年度タル一九一三年ニ比シ二八一二九年度ニ於ケル輸送貨物ハ二倍以上ニ達シテキル本年ハ六倍ニ達スルデアロウ然シ産業財政計畫ノ遂行ニ於テハ大ナル中絶ヲ見テキルノデアル

BII

北樺太ニ於テハ半ケ年二十萬噸ノ貨物ヲ輸送シ得ナカツタ

船舶ハ必要以上ニ長時間積卸作業ノ爲ニ停泊スル一航海ニ於ケル船舶停泊日數ハ平均九晝夜ニ及ンデキル港灣設備ノ建設「プログラム」モ遂行セラレナカツタ

又顯著ナル増加ヲ示シタノハ河川船舶ノ輸送貨物デアル昨年中其ハ九〇%ヲ増加シテキル然シ其ノ生産的「プログラム」ハ實現セラレナカシタ河川運輸機關ハ各區^{ライオン}及部落ヲ役スル處少ナク且「コルホーズ」及「ソフホーズ」ノ要求ヲ満足セシムル様改善ヲ見ナカツタ

河川運輸活動ノ範圍ハ現在全ク不充分デアル其ノ貨物輸送量ハ烏蘇里鐵道輸送量ノ一割ニシカ當ラナイ此ノ原因ノ一ハ烏鐵ノ運賃ノ低

BII

廉ナルコトデ烏鐵ハ斯クシテ河川運輸ト競争シ河川輸送ヲ不利益ナ
ル状態ニ直イテキル斯ル商人的方法ハ嚴重批判セラルベキデア
横卸作業機械化ニハ特別注意ガ拂ハルベキニ不拘現在其ハ殆ド等閑
ニ付サレテキル貨物横卸線ノ設備ハ最モ惡イ例ヘバ哈府ニ於テハ
「ブラットホーム」付横卸線ハ一本ヲ有スルノミ黒龍江全流域ヲ通
シ四ヶ所ノ埠頭ガアルガ何レモ設備不完全デア
ル河川底ノ掘下及清
淨作業ハ不充分デアツタ

烏鐵ノ技術的状态ハ頗ル不安ナモノガアル鐵道ノ改造ヲ繼續シ銳意
運輸建設ヲ進展セシメネバナラヌ最近數年ニ鐵道輸送貨物ハ著シク
増加シタ二七―二八年度ニ於ケル貨物輸送量ハ三百五十八萬噸デア
ツタガ二九―三〇年度ニハ四日四十五萬噸迄増加シタ三三年度ニハ二

BII

千萬噸ニ達スベク豫想セラレテキル同時ニ旅客輸送モ亦激増シタ
運輸ニ於ケル中絶状態ヲ見ルキ貨物機關車ノ一晝夜ノ平均速度ニ就
テ一〇―二〇%貨車ニ就テ一〇―二〇%ノ米遂行ヲ現シ貨物列車商業速度ニ
付一八―二〇%貨物列車ノ荷卸ニ付五―一〇%ノ米遂行ヲ示シタ

此等附随ノ原因ハ運輸業社會的組織ノ活動微弱ナルコト鐵道各區ノ
獨立任ノ不充分ナルコト管理指導部ノ誤算・労働紀ノ弛緩セルコ
ト等デア
ル鐵道運輸業ハ現在最モ責任アル労働部門トシテ極東地方執
行委員會及地方全民警衆ノ特別ナル監視ノ下ニ置カネバナラヌ
航空輸送ニ就テハ客年當地方ニハ二線ノ航空路ガ開設セラレタ即チ
「ハバロフスク」「ニコラエフスク」「オハ」線及「ハバロフスク」
「マリンスク」「アレクサンドロフスク」線デア
ル航空輸送業務ニ

BII

於ケル弱點ノ一ハ飛行機ニ對スル航空士ノ不注意デアル事實^業年度中
吾々ハ相等數ノ機械ヲ損傷シタ然シ四四四號旅客機ノ拔群ナル成績
ハ特記セネバナラヌ同機ハ課題ノ一ニテ其ノ「アログラム」ニ

於テ遂行シタ

運輸業ハ其ノ發達ニ於テ全産業ノ一般的「テンポ」ヨリ遅レテキル
本年吾々ハ全事業ニ總體的躍進ヲ爲シ前年ノ^{未遂}中絶ヲ補填シナケレバ
ナラヌ吾々ハ「モロトフ」及「スターリン」氏ノ指令ヲ遂行シ産業
財政計畫ヲ完成シ更ニ之ヲ發端セネバナラヌ

BII

公 信 案

別紙

文書課長

(甲 號 用 紙)

文書課發送一 昭和六年參月六日 發送済

淨書

正校(原稿)

(淨書)

主 歐米局長

主 第一課長

昭和六年參月二日

歐米局長

號

昭和

昭和六年參月五日附

附屬書

通

受信

今井且彦

發信

永井外務局長

人名

青木鉄通

人名

件名

極東地方運輸事業の現状並に
平井の報告書

綴 雑算
名 達

本件ニ關シ今般在ハロフス、小押徳子代現ヨリ別紙寫ノ通報告ア

リタルニ付御參考ノ爲右茲ニ送付ス

(昭和六年二月十九日附在ハロフス)

館來往電第

四二

號寫並附屬書寫

公 信 案

外

務

省

要
一
部
送
山

(分類 F1.0.0.6)

5 56

F-0069

歐米局
本普通第五四號

昭和六年三月二十六日

在亞港

總領事佐々木靜吾

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

本年初航ノ汽船入港ノ件

本年冬期結氷中ニ從事スヘキ苦ナリシ築港及鐵道敷設工事用機械類ヲ運搬スルタメ浦潮港ヨリ碎氷船ヲ先導トスル汽船ハ一月中旬又ハ下旬當地ニ入港セシムル旨豫テ當地方當局者カ聲言シ居タルニ拘ラヌ其後更ニ其形跡無カリシ處本年二月十七日汽船「スナブジエーネ

ツ」號カ碎氷船「ダウイド」號ト共ニ達且海峽國境附近ニテ氷原ニ閉チ込メラレ進退ノ自由ヲ失ヒタリトノ電無電アリ、之カ救援誘導ノタメ飛行機「エス、エス、エス、エル、」四四三號ヲ派遣シ同月二十日朝「ビレオ」ニ入港セシメタルコトハ客月二十四日附本普通第三四號ヲ以テ及報告シタル通ナルカ同船ハ「アグネオ」「アクチャプリスキ」「ヲ經テ當港ニ廻航スル者ナリシ處碎氷船「ダウイドフ」號推延機ヲ破損シ「スナブジエーネツ」號ハ同船ヲ曳航シ本日「アクチャプリスキ」炭坑ヨリ浦潮港ニ引返スコトナリ其代船トシテ「カムチャダール」及「ブリヤード」號カ碎氷船「ドーブルイニヤ、ニギーチチ」號ニ引卒セラレ本月二十二、三日頃當地ニ入港スヘシトノ報傳ハリ當地方在住民ハ鶴首シテ待居タル折柄今回ハ豫定ノ如ク二十三日先ツ

「ドール」ニヤ、ニギイチチ」號入港シ續イテ二十四日「カムチヤ
「ドール」號ハ沖合ニ其姿ヲ現ハシ「ブリアート」號ハ「アグネオ」行
貨物ヲ搭載シ同地ニ寄航セリト^{謂フ}新開紙ノ傳フル所ニ依レハ碎氷
船「ドール」ニヤ、ニギイチチ」號ノ積荷一、四〇〇噸ハ主トシテ
食料品ニシテ牛酪、植物油、燃料油等ヲモ積載シ居レリ荷場ケ後他ノ
汽船ヲ出迎フル^為更ニ出航スル筈ナリト^{謂フ}碎氷船ノ當地入港ハ
只ニ結氷期間ニ於ケル生活ノ單調ヲ破リ一月以降久シキ間ノ期待ヲ實
現セシノミナラス日下極度ニ缺乏中ノ食料品ヲ積載シ居レリトノ噂ハ
當地住民ニ一道ノ生氣ヲ興ヘタリ
因ニ一月中旬又ハ下旬ニ強航スヘキ筈ナリシ「スナブジエーネツ」號
カ遂ニ當地ニ廻航セス「アクチャブリスキー」炭坑ヨリ引返スコト

B11

ナリタル結果築港工事關係者中ニハ早クモ政府ハ當地ノ築港計劃ヲ中
止セリトノ風説ヲ流布スルモノアリ、本年冬期中前觸宣傳ノ大要^要被ナ
リシニ拘ラス無爲ニ経過シタル事實ト資金難ノ狀況トニ鑑ミ右風説ハ
何等カノ根據ヲ有スルモノニ非サルヤト思考セラル、モ暫ク其成行ヲ
靜觀セントス
右御參考迄御報告申進ス

本信寫發送先

在蘇聯邦

廣田大使

B11

(分類 F15.0.6)

通商

第 一 號

昭和六年四月二十七日

第一

在浦潮斯德

總領事

山口

爲太郎

外務大臣男爵 幣原 喜重郎 殿

「カムチャツカ」方面行定期船表送付ノ件

本年度浦潮「カムチャツカ」間定期船發着表一部御參考迄ニ及送付

記録所長官航運課長次報告係記録係

昭和六年五月四日 接受
別紙添附

BI

F-0069

0147

СОБТОРФОТ

РАСПИСАНИЕ РЕЙСОВ НА 1931 ГОД.

НДУГОВЫЕ ЗАПАДНО-КАМЧАТСКИЕ СРОЧНЫЕ РЕЙСЫ.

II. В ЗАХОДА	Милл	Црхон	Отход
Рейс № 1			
Камчатка	1517	29 Мая	30 Мая
Петропавловск	1531	30	31 Июня
Кавра	1534	31	1 Июня
Митва	1535	2	2
Большерек	1536	3	3
Омута	1537	4	4
Камчатка	1538	5	5
Петропавловск	1539	6	6
Кавра	1540	7	7
Митва	1541	8	8
Большерек	1542	9	9
Омута	1543	10	10
Камчатка	1544	11	11
Петропавловск	1545	12	12
Кавра	1546	13	13
Митва	1547	14	14
Большерек	1548	15	15
Омута	1549	16	16
Камчатка	1550	17	17
Петропавловск	1551	18	18
Кавра	1552	19	19
Митва	1553	20	20
Большерек	1554	21	21
Омута	1555	22	22
Камчатка	1556	23	23
Петропавловск	1557	24	24
Кавра	1558	25	25
Митва	1559	26	26
Большерек	1560	27	27
Омута	1561	28	28
Камчатка	1562	29	29
Петропавловск	1563	30	30
Кавра	1564	31	31
Митва	1565	1 Июн	1 Июн
Большерек	1566	2	2
Омута	1567	3	3
Камчатка	1568	4	4
Петропавловск	1569	5	5
Кавра	1570	6	6
Митва	1571	7	7
Большерек	1572	8	8
Омута	1573	9	9
Камчатка	1574	10	10
Петропавловск	1575	11	11
Кавра	1576	12	12
Митва	1577	13	13
Большерек	1578	14	14
Омута	1579	15	15
Камчатка	1580	16	16
Петропавловск	1581	17	17
Кавра	1582	18	18
Митва	1583	19	19
Большерек	1584	20	20
Омута	1585	21	21
Камчатка	1586	22	22
Петропавловск	1587	23	23
Кавра	1588	24	24
Митва	1589	25	25
Большерек	1590	26	26
Омута	1591	27	27
Камчатка	1592	28	28
Петропавловск	1593	29	29
Кавра	1594	30	30
Митва	1595	31	31
Большерек	1596	1 Июн	1 Июн
Омута	1597	2	2
Камчатка	1598	3	3
Петропавловск	1599	4	4
Кавра	1600	5	5
Митва	1601	6	6
Большерек	1602	7	7
Омута	1603	8	8
Камчатка	1604	9	9
Петропавловск	1605	10	10
Кавра	1606	11	11
Митва	1607	12	12
Большерек	1608	13	13
Омута	1609	14	14
Камчатка	1610	15	15
Петропавловск	1611	16	16
Кавра	1612	17	17
Митва	1613	18	18
Большерек	1614	19	19
Омута	1615	20	20
Камчатка	1616	21	21
Петропавловск	1617	22	22
Кавра	1618	23	23
Митва	1619	24	24
Большерек	1620	25	25
Омута	1621	26	26
Камчатка	1622	27	27
Петропавловск	1623	28	28
Кавра	1624	29	29
Митва	1625	30	30
Большерек	1626	31	31
Омута	1627	1 Июн	1 Июн
Камчатка	1628	2	2
Петропавловск	1629	3	3
Кавра	1630	4	4
Митва	1631	5	5
Большерек	1632	6	6
Омута	1633	7	7
Камчатка	1634	8	8
Петропавловск	1635	9	9
Кавра	1636	10	10
Митва	1637	11	11
Большерек	1638	12	12
Омута	1639	13	13
Камчатка	1640	14	14
Петропавловск	1641	15	15
Кавра	1642	16	16
Митва	1643	17	17
Большерек	1644	18	18
Омута	1645	19	19
Камчатка	1646	20	20
Петропавловск	1647	21	21
Кавра	1648	22	22
Митва	1649	23	23
Большерек	1650	24	24
Омута	1651	25	25
Камчатка	1652	26	26
Петропавловск	1653	27	27
Кавра	1654	28	28
Митва	1655	29	29
Большерек	1656	30	30
Омута	1657	31	31
Камчатка	1658	1 Июн	1 Июн
Петропавловск	1659	2	2
Кавра	1660	3	3
Митва	1661	4	4
Большерек	1662	5	5
Омута	1663	6	6
Камчатка	1664	7	7
Петропавловск	1665	8	8
Кавра	1666	9	9
Митва	1667	10	10
Большерек	1668	11	11
Омута	1669	12	12
Камчатка	1670	13	13
Петропавловск	1671	14	14
Кавра	1672	15	15
Митва	1673	16	16
Большерек	1674	17	17
Омута	1675	18	18
Камчатка	1676	19	19
Петропавловск	1677	20	20
Кавра	1678	21	21
Митва	1679	22	22
Большерек	1680	23	23
Омута	1681	24	24
Камчатка	1682	25	25
Петропавловск	1683	26	26
Кавра	1684	27	27
Митва	1685	28	28
Большерек	1686	29	29
Омута	1687	30	30
Камчатка	1688	31	31
Петропавловск	1689	1 Июн	1 Июн
Кавра	1690	2	2
Митва	1691	3	3
Большерек	1692	4	4
Омута	1693	5	5
Камчатка	1694	6	6
Петропавловск	1695	7	7
Кавра	1696	8	8
Митва	1697	9	9
Большерек	1698	10	10
Омута	1699	11	11
Камчатка	1700	12	12
Петропавловск	1701	13	13
Кавра	1702	14	14
Митва	1703	15	15
Большерек	1704	16	16
Омута	1705	17	17
Камчатка	1706	18	18
Петропавловск	1707	19	19
Кавра	1708	20	20
Митва	1709	21	21
Большерек	1710	22	22
Омута	1711	23	23
Камчатка	1712	24	24
Петропавловск	1713	25	25
Кавра	1714	26	26
Митва	1715	27	27
Большерек	1716	28	28
Омута	1717	29	29
Камчатка	1718	30	30
Петропавловск	1719	31	31
Кавра	1720	1 Июн	1 Июн
Митва	1721	2	2
Большерек	1722	3	3
Омута	1723	4	4
Камчатка	1724	5	5
Петропавловск	1725	6	6
Кавра	1726	7	7
Митва	1727	8	8
Большерек	1728	9	9
Омута	1729	10	10
Камчатка	1730	11	11
Петропавловск	1731	12	12
Кавра	1732	13	13
Митва	1733	14	14
Большерек	1734	15	15
Омута	1735	16	16
Камчатка	1736	17	17
Петропавловск	1737	18	18
Кавра	1738	19	19
Митва	1739	20	20
Большерек	1740	21	21
Омута	1741	22	22
Камчатка	1742	23	23
Петропавловск	1743	24	24
Кавра	1744	25	25
Митва	1745	26	26
Большерек	1746	27	27
Омута	1747	28	28
Камчатка	1748	29	29
Петропавловск	1749	30	30
Кавра	1750	31	31
Митва	1751	1 Июн	1 Июн
Большерек	1752	2	2
Омута	1753	3	3
Камчатка	1754	4	4
Петропавловск	1755	5	5
Кавра	1756	6	6
Митва	1757	7	7
Большерек	1758	8	8
Омута	1759	9	9
Камчатка	1760	10	10
Петропавловск	1761	11	11
Кавра	1762	12	12
Митва	1763	13	13
Большерек	1764	14	14
Омута	1765	15	15
Камчатка	1766	16	16
Петропавловск	1767	17	17
Кавра	1768	18	18
Митва	1769	19	19
Большерек	1770	20	20
Омута	1771	21	21
Камчатка	1772	22	22
Петропавловск	1773	23	23
Кавра	1774	24	24
Митва	1775	25	25
Большерек	1776	26	26
Омута	1777	27	27
Камчатка	1778	28	28
Петропавловск	1779	29	29
Кавра	1780	30	30
Митва	1781	31	31
Большерек	1782	1 Июн	1 Июн
Омута	1783	2	2
Камчатка	1784	3	3
Петропавловск	1785	4	4
Кавра	1786	5	5
Митва	1787	6	6
Большерек	1788	7	7
Омута	1789	8	8
Камчатка	1790	9	9
Петропавловск	1791	10	10
Кавра	1792	11	11
Митва	1793	12	12
Большерек	1794	13	13
Омута	1795	14	14
Камчатка	1796	15	15
Петропавловск	1797	16	16
Кавра	1798	17	17
Митва	1799	18	18
Большерек	1800	19	19
Омута	1801	20	20
Камчатка	1802	21	21
Петропавловск	1803	22	22
Кавра	1804	23	23
Митва	1805	24	24
Большерек	1806	25	25
Омута	1807	26	26
Камчатка	1808	27	27
Петропавловск	1809	28	28
Кавра	1810	29	29
Митва	1811	30	30
Большерек	1812	31	31
Омута	1813	1 Июн	1 Июн
Камчатка	1814	2	2
Петропавловск	1815	3	3
Кавра	1816	4	4
Митва	1817	5	5
Большерек	1818	6	6
Омута	1819	7	7
Камчатка	1820	8	8
Петропавловск	1821	9	9
Кавра	1822	10	10
Митва	1823	11	11
Большерек	1824	12	12
Омута	1825	13	13
Камчатка	1826	14	14
Петропавловск	1827	15	15
Кавра	1828	16	16
Митва	1829	17	17
Большерек	1830	18	18
Омута	1831	19	19
Камчатка	1832	20	20
Петропавловск	1833	21	21
Кавра	1834	22	22
Митва	1835	23	23
Большерек	1836	24	24
Омута	1837	25	25
Камчатка	1838	26	26
Петропавловск	1839	27	27
Кавра	1840	28	28
Митва	1841	29	29
Большерек	1842	30	30
Омута	1843	31	31
Камчатка	1844	1 Июн	1 Июн
Петропавловск	1845	2	2
Кавра	1846	3	3
Митва	1847	4	4
Большерек	1848	5	5
Омута	1849	6	6
Камчатка	1850	7	7
Петропавловск	1851	8	8
Кавра	1852	9	9
Митва	1853	10	10
Большерек	1854	11	11
Омута	185		

ВОСТОЧНО-КАМЧАТСКАЯ СРОЧНАЯ ЛИНИЯ 1931 год. (два раза в месяц)

П. п. захода	М. п.	Рейс № 2		Рейс № 3		Рейс № 4		Рейс № 5		Рейс № 6		Рейс № 7		Рейс № 8		Рейс № 9		Рейс № 10	
		приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход
Владивосток	—	—	3 апр.	—	19 апр.	—	3 мая	—	19 мая	—	2 июня	—	18 июня	—	2 июля	—	18 июля	—	10 авг.
Петропавловск	1370	10 апр.	12 "	26 апр.	28 "	10 мая	12 "	26 мая	28 "	9 июня	11 "	25 июня	27 "	9 июля	11 "	25 июля	27 "	8 авг.	10 "
Усть-Камчатск	270	14 "	17 "	30 "	3 мая	14 "	17 "	30 "	2 июня	13 "	16 "	29 "	2 июля	13 "	16 "	29 "	1 авг.	12 "	15 "
Петропавловск	270	19 "	21 "	5 мая	7 "	19 "	21 "	4 июня	6 "	18 "	20 "	4 июля	6 "	18 "	20 "	3 авг.	5 "	17 "	19 "
Владивосток	1370	23 "	—	14 "	—	28 "	—	13 "	—	27 "	—	13 "	—	27 "	—	12 "	—	26 "	—
Итого	3280																		

П. п. захода	М. п.	Рейс № 11		Рейс № 12		Рейс № 13		Рейс № 14		Рейс № 15		Рейс № 16		Рейс № 17		Рейс № 18		Рейс № 19	
		приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход	приход	отход
Владивосток	—	—	17 авг.	—	31 авг.	—	16 сент.	—	30 сент.	—	16 окт.	—	30 окт.	—	25 нояб.	—	29 нояб.	—	24 дек.
Петропавловск	1370	24 авг.	26 "	7 сент.	9 сент.	23 сент.	25 "	7 окт.	9 окт.	23 окт.	25 "	6 нояб.	8 нояб.	22 нояб.	24 "	6 дек.	8 дек.	21 дек.	24 "
Усть-Камчатск	270	28 "	30 "	11 "	14 "	27 "	30 "	11 "	14 "	29 "	30 "	10 "	13 "	26 "	29 "	10 "	13 "	—	—
Петропавловск	270	2 сент.	4 сент.	16 "	18 "	20 окт.	4 окт.	16 "	18 "	1 нояб.	3 нояб.	15 "	17 "	1 дек.	3 "	15 "	17 "	—	—
Владивосток	1370	11 "	—	25 "	—	11 "	—	25 "	—	10 "	—	24 "	—	10 "	—	24 "	—	31 дек.	—
Итого	3280																		

ПРИМЕЧАНИЕ: В зависимости от времени окончания коммерческих операций, а также по навигационным условиям даты отхода и прибытия по все п. п., кроме Владивостока, могут быть изменены без особого уведомления.

F-0069

0:49

(分類 4.1.5.2.6)

歐米局

通商局第一課

公第八三號

昭和六年九月二十二日

在オデッサ

領事 田中 文一

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

一九三〇年「ソ」聯邦海運狀況ニ關スル件

本件ニ關シ水運部機關雜誌所載記事ニ依リ別紙ノ通り茲ニ報告申進ス



昭和六年拾月拾貳日接受

(分類 F.1.5.0.6)

公信案

昭和六年三月廿七日附在 亞港佐々木總領事館來書

第五四號

外務省

リタルニ付御參考ノ爲右茲ニ送付ス

本件ニ關シ今般在 亞港佐々木總領事館ヨリ別紙寫ノ通報告ア

件名

本年初航ノ汽船ノ亞港入港ニ關スル件

綴込 亞港佐々木總領事館來書

人名

廣幡 長船局長

人名

松島 政事局長

受信

遞信省

發信

歐一普通第

〇號

昭和

昭和六年五月四日附

附屬書

通

文書課發送一 昭和六年五月四日 發送済

淨書

正校(原稿)

文書課長

公信案

別紙

(原議用紙甲)

4 58

F-0069

0:50

正

一九三〇年「ソ」聯邦ノ海運

海運貨物量

一九三〇年ノ「ソウエト」海運量ハ三千四百五十萬噸ニシテ前年ニ比シ四六七%ノ増加ナルモ戰前一九一三年ノ三千三百十萬噸ニ比スレハ僅ニ四三%ノ増加ニシテ鐵道運輸ノ一七九%、河川水運ノ三一%ノ増加ニ比スレハ其發達極メテ微弱ナリ

「ソウエト」海運ノ運輸上ニ於ケル位置ハ一九三〇年ノ運送量ハ運輸總量ノ十%ニシテ一九二九年ノ九%ヨリ少シク良好トナリタルモ戰前一九一三年ノ一五五%ニ及ハス

B11

外國輸出入

一九三〇年海運量ノ内譯左ノ如シ（單位千噸）

外國輸出入	二、八一	對前年増率	八一%
大沿岸貿易	三〇〇	同	一七%
小沿岸貿易	一、三三	同	三五九%
計	三四五〇	同	四六七%

外國輸出入額ハ全海運量ノ六三二%ヲ占ムルカ其輸出輸入別左ノ如シ（單位千噸）

輸出	二〇〇〇四	對前年増率	五四〇%
----	-------	-------	------

B11

	米		佛	
	出	入	出	入
	一五九	一六〇	一二〇	一一八
右ハ「ソウエト」側ノ船舶セルモノヲ含ムモノニシテ希臘、イタリ、 諸國及英國船殊ニ穀物ノ輸出入ニ此種ノモノ多シ				
海 港				
一九三〇年海港ノ荷扱高ハ四千五百四十八萬噸ニシテ前年ニ比シ四三 九%ノ増加ヲ見タリ然レトモ其主要港ノ荷扱高ハ米々戰前ニ及ハサル モノアリ其荷扱高左ノ如シ				

BII

港	一九三〇年荷扱高 (千噸)		一九三一年ニ對スル 一九三〇年ノ%	
	一九三〇年	一九三一年	一九三〇年	一九三一年
レニングラド	七三〇五	六二八五	六二八五	八四〇%
オデッサ	四一七四	六二五%	六二五%	八四〇%
ニコラエフ	三六〇〇	四三〇%	四三〇%	八四〇%
ヘルソン	一一一四	二二二%	二二二%	八四〇%
バツウム	一四九五	一八三%	一八三%	八四〇%
浦 潮	一三二一	一八三%	一八三%	八四〇%
(以上)				

BII

228

輸出		千噸	對前年増率
110004			五四〇%
外國輸出入額ハ全海運量ノ六三二%ヲ占ムルガ其輸出入別左ノ如シ			
(單位千噸)			
外國輸出入			
一九三〇年海運量ノ内譯左ノ如シ。(單位千噸)			
外國輸出入	二、八一	對前年増率	八一%
大沿岸貿易	三〇〇	同	二七%
小沿岸貿易	一、三三八	同	三五九%
計	三四五〇〇	同	四六七%

(分類 F. 1.5.0.6.)

海外經濟事務
昭和26年11月18日
第4年第46號



一九三〇年ノ「ソ」聯邦ノ海運
一九三〇年ノ「ソ」聯邦ノ海運量ハ三千四百五十萬噸ニシテ前年ニ比シ四〇%ノ増加ナルモ戰前一九一三年ノ三千三百十萬噸ニ比スレバ僅ニ四三%ノ増加ニシテ鐵道運輸ノ一七九%、河川水運ノ三一%ノ増加ニ比スレバ其發達極メテ微弱ナリ。
「ソ」聯邦ノ海運ノ運輸上ニ於ケル位置ハ一九三〇年ノ運送量ハ運輸總量ノ十%ニシテ一九二九年ノ九%ヨリ少シク良好トナリタルモ戰前一九一三年ノ一五五%ニ及ハズ。

昭和六年拾月拾貳日接受

230

ト、輸出品ハ大部分外國船ニ依ルモノナリ、右ハ主トシテ穀物輸出増加ノ結果ナリ。	
ハ、聯邦ハ自國船不足ノ爲メ沿岸貿易ニ外國船ヲ傭船シツ、アル處大沿岸貿易上傭外國船ニ依ル輸送量ノ割合ハ	
一九二九年	五三八%
一九三〇年	二八二%
ニシテ漸次自國船ヲ擴充シツ、アルコトヲ知ルベシ。	
外國船ロロ	
聯邦輸出入貨物ノ外國船ノ輸送量左ノ如シ。	
登簿噸數 (千噸)	貨物量 (千噸)

BII

229

右輸出入貨物輸送船國籍別ニ付テハ、ハソグヴェト、船ハ	
輸入	一、五八〇七
輸出	一、四八八九
計	一、五三三七
ニシテ全體ニ對スル百分比ハ左ノ如シ。	
一九二九年	一九三〇年
輸入 七一%	四九%
輸出 四二%	四四%
計 一〇三%	八二%
右ノ如クハ、ハソグヴェト、船ハ外國輸入貨物ノ四割臺ヲ占ムルモ、ハソグヴェト	

BII

232

スウェーデン		内土		その他		小計		日本		丁抹
出	入	出	入	出	入	出	入	出	入	出
一五一	一五一	二七三	二九五	一、一六九	一、二〇四	五〇〇二	五〇五九	四四〇	四七一	四三四
				八、九二一〇	八、九六八八	九、八九五三	九、八三三六	七、六五三	七、九二七	五、一八五
				二、五一四三	二、三一八	一、六五一七六	七、七五九	九、八五七	三、九八	九、三五五

BII

231

伊		諸威		希		獨		英	
入	出	入	出	入	出	入	出	入	出
四四二	七六四	七六九	七二五	八四七	八五五	八六九	八五八	九二七	九二九
五〇九三	一、九五〇六	一、九六二七	一、一六七七	一、二九三八	一、八三二六	一、二二五九	一、一二五九	三、四二四八	三、四〇八四
	三、二一四三	三、五〇	二、一二三八	一、七四三	三、四八三九七	八七七	一、八六四八	三、九〇四五	二、二二二

BII

233

機	入		出	
	一六〇	一五九	一六〇	一五九
右ハ、ソウエト	側ノ備船セルモノヲ含ムモノニシテ希臘、伊太利、			
諸威及英國船殊ニ穀物ノ輸出ニ此種ノモノ多シ。				

海 港

一九三〇年海港ノ荷扱高ハ四千五百四十八萬噸ニシテ、前年ニ比シ四三九ノ増加ヲ見タリ、然レドモ其主要港ノ荷扱高ハ未ダ戰前ニ及バザルモノアリ其荷扱高左ノ如シ。

234

港 名	一九一三年荷扱高 (千噸)	一九三〇年ニ對スル 年ノ%
レニングラド	七三〇五	六二八%
オデッサ	四一七四	六二五%
ニコラエフ	三六〇〇	八四〇%
ヘルソン	二一一四	四三〇%
バツウム	一四九五	二三七一%
ウラジミール	一三二一	一八三三%
浦 潮		

十以上

一九二〇年以來北海航路委員會ニヨリ毎年行ハレ
策リタルガ一九二八年同委員會ハ北西伯利國營株
式會社「ムルセーラエル」ニ再組織セラレ爾來全會
社ハ東西シベリヤ、シラル及カザクスタンヲ西歐及亞米
利加ノ諸港ト連結シ前記諸地方ノ各種原料品ノ
世界市場ヘ進出ヲ計ル外航路ノ諸設備完成
築港特種船隊ノ編成等ニ意ヲ注グト共ニ輸出貨
品ニ關聯スル地方産業ノ開發ニ努カシ來タリシ結果
輸出品目及數量モ漸次確實性ヲ帶ブルニ至リ
殊ニ一九二四年ヨリ始メラレタル木材輸出ハ斷然頭
角ヲ現ハシ他ノ輸出品目中ニ一躍壓到的ノ地位
ヲ占ムルニ至レリ

カラ海貿易ハ比較的値低ク且輸送上不便

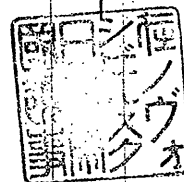
歐米局

公第五八號

昭和六年十一月五日

在ノゾシビルスク

領事館事務代理 中村限三郎



外務大臣男爵幣原喜重郎殿

北洋航路譯報ノ件

オビ、エニセイ河河口及カラ海經由北海航路ニ依リ行
ハル、西伯利輸出入貿易ヲ「カラスカマエキス」ペディヤ
「カラ」海航路ト稱シ

外國汽船會社航路部係附件

昭和六年三月拾四日接受

ナル而伯利木材其他ノ原料品ノ歐洲市場ヘノ唯一ノ仲
 介者トシテ西伯利木材工業ヲ刺シ輸出向ヲ主トスル
 製材工場ノ出現ヲ促シ從ツテ木材工業ハ運輸ノ関
 係上漸次西伯利諸河ノ下流及カラ海貿易積極地ニ
 移行シ北部地方ノ經濟開發ノ先驅ヲ爲スニ至ルベシ
 カラ海貿易ニ関シテハ屢々報告セル所ニシテ殊ニ
 昭和四年三月一日附公第六號北氷洋航路ト「カラ
 海貿易」(海外經濟事情第二年第七號所載)ニ盡サ
 レ居ルモカラ海貿易ハ西伯利ノ工業化ト相俟チ
 今後益々西伯利ノ對外貿易並ニ北部邊境地方
 開發ニ寄與スル所大ナル可ク注目ニ値スルモト思考
 サルヲ以テ聊カ屋下加木屋ノ感ナキ能ハザルモ何等
 御參考迄左記譯報ス

本信寫送付先 在ソレ聯邦大使

北洋航路

歐羅巴ヨリ西伯利中部ニ至ルニ水路連
絡ヲ利用セントスル考ハ新シキモノニ非ザルモ
其ノ實現ヲ見ルニ至リタルハ僅々拾年ヲ出デズ
北洋航路ニ依リ「オビレ」及「エニセイ」河口
ヲ經テ西伯利トノ正規ノ通商ノ始マリタルハ
十九世紀ノ七十年代ト見ルヲ得 爾來毎年
商船ノ此ノ西河口ヲ訪レザリシ年トテハ殆ンド
無カリシモ其ノ船舶ノ數ハ該路ニ依ル貿易
ニ對シ或ハ特典ヲ與ヘ或ハ之ヲ廢止シタリシ
帝政ロシア政府ノ關稅政策ノ變革ニ依リ
増減ヲ免レザリキ 該年間ニ「オビレ」及「エニ
セイ」河口ニ來航セル船舶數次ノ如シ

CII

一八七六年	一隻	一八八六年	一隻	一八九六年	二隻
一八七七年	三	一八八七年	一	一八九七年	五
一八七八年	二	一八八八年	七	一八九八年	四
一八七九年	一	一八八九年	一	一九〇一年	一
一八八〇年	三	一八九〇年	三	一九〇三年	一
一八八一年	二	一八九一年	二	一九〇四年	二
一八八二年	一	一八九二年	一	一九〇五年	二
一八八三年	一	一八九三年	一	一九〇六年	一

帝政政府ハ其ノ晚年「ウラル」經由西伯利貿易ヲ掌握セシ莫斯科・ペトロブルグ^取勢力家團
体ノ數ハ買ヲ急ニ北洋貿易ヲ扼塞セリ
曾テ北洋航路ノ系統的研究ノアリシヲ聞
カズ「カラ海」ヲ經テ西伯利・歐羅巴ノ通商開

CII

係設定ニ對スル企業家ノ企圖ナキニ非ザリ
シモ此等ハ孰レモ北洋航路ノ自然的條件ノ
科學的調査基礎ヲ置カズ又調査ノ前ニ橫
ハル^{ハル}自然的障害ヲ克服スルニ足ル周到ナル組織
的手段ヲ撰バザリシ爲多クハ成行ニ妥セラレ
屢々不成功ニ終リタリキ

漸ク國家ノ危機ヲ告グルニ際シ帝政政府ハ
始メテ北洋航路ニ注意ヲ向ケ其ノ研究及設
備ニ對シ或ル手段ヲ講セントシタリ 一九一三
年ニ於テ常設無線電信局ガ「エーブルスキー、シマル」
「グアイガナ」及「フォルレサレ」ニ設立セラレ 更ニ大戦
中「ワスケー、エセイス」港ノ建設ニ着手セラレタリ
政府ノ對革命政策ノ結果 北洋航路ハ「イリド」

CII

氏ヲ社長トスル諾威株式會社ニ依リ代表セラル、
外國資本ノ手ニ渡レリ 前記會社ハ「エニセイ」河
岸ノ輸出的意義ヲ有スル各種企業ヲ占領シ
挽材工場、製紙工業場等ノ建設ヲ日論ミ更ニ
「エニセイ」「オビレ」河汽船ノ株券ヲ買占メタリ 斯ク
ノ如ク戦前ハ之ヲ通シテ始メハロシア 後ハ外國
資本ニ依ル西伯利亞富源掠奪時代ト稱シ得ベシ
北洋航路ノ利用セラルヤ一ノ系統の利用法ノ
研究ヲ伴ハズ之ヲ支配シタルハ只 其ニ何等
出費ヲ擲ケズシテ低廉ナル航路ヲ利用セントス
ル哉欲ノ発動ニ外ナラザリシナリ 斯クノ如ク西
伯利亞中央亞西亞ノ國内資本ノ殖民地タラ
シノントスル西伯利亞掠奪次イデハ國際資

CII

本タル孫奪者ニ止ヲ刺シタルハ十月革命其
者ナリキ

一九二〇年西伯利ニ於ケルソシアエドレ政權樹立ト
共ニ北洋航路問題ハ地方ノ重要題目トナリ
國家的重要意義ヲ有スル問題トハナレリ
一九二〇年四月二十日西伯利革命委員會ニ附屬
シテ北洋航路委員會ナルモノ設置セラレタルガ
後ニソレ聯邦貿易人民委員會ノ直轄ニ移サル
北洋航路委員會ノ活動ノ結果毎年「オビレ」ニ
ニセイレ河口及「カラ海」經由輸出入貿易ノ海航
行ノ組織ヲ見ルニ至レリ此ノ航海ハ世ニ「カラ海
貿易」ト呼バル、モノニシテ北洋航路ノ商業
的利用開發上ニ相次イデ多クノ經驗ヲ齎ラシ

タリ「カラ海貿易」ヲ行フコトハ初期ニアリ

テハ非常ナル困難ヲ伴ヒタリ

北洋航路ノ商業的開發問題ハ當時不信ト
疑惑ノ眼ヲ以テ迎ヘラレタリ一般ニ流布サレタル
「カラ海」通航ヲ困難ナリトスル固陋ナル意見ハ
尙一掃サレズ此考ガ法外ナル保險料及船
賃ノ主ナル原因トモナレリ上記ノ事情ハ北洋航
路利用ヲ非常ニ高價ナルモノトナラシメ、度ニ國
家ヲシテ「カラ海」通過貨物ハ一切ノ關稅ヲ免除
セシガ如キ或種ノ保護手段ヲ取ル、余儀ナキニ
至ラシメタリ

北洋航路委員會ハ「オビレ」及「エニセイ」河口及
其等ノ灣内ノ必要ナル區域ノ海工學的調

省ヲ組織的ニ行ヒ 築港ニ最好適セル小灣ノ
 発見ニ努メオリシガ 此等ノ事業ノ結果ノノイ
 ポルトレ及ノイガルカレノ開港ヲ見タリ 新無線電信
 局ハノイマトーケヤン、シヤルレノノイグアイポルトレニ新設セラレ
 水理學的氣象學的調査ハ、ノカラ海レノ、真只中ニ
 行ハレ全海ノ流水亦研究ノ對象トサレ居レリ
 ノノイグアイセムリヤレノ海峽ノエニセイレ灣及ノオビレ灣ニ
 於テハ夜間航海標識ノ設備モナラントシ新標
 識ハ諸所ニ建テラレ其ノ上ニハ燈明ヲ明付ケ
 居レリ又河川運送ノ後 特別ナル埠頭用モーター
 船ヲ建造セラレツ、アリ
 北洋航路委員會存續時代ニ於ケル輸出入運輸
 航海ノ業績ハ西伯利ノ河口港ヲ訪レタル次

ノ船舶數ニ依リ電報知スルヲ得			
一九二一年	五隻	一九二五年	四隻
一九二二	五	一九二六	五
一九二三	一	一九二七	六
一九二四	三	一九二八	八
ゴムセウエルブーケレ會社（北方地方ヲラル東西西伯利 及ヤクーツクノ産業的開發及北洋航路ニ依リノ聯邦 亞細亞ノ諸都市ト政米各港トノ連絡ニ當ル産業 業及運輸國營會社）ハノカラ海レノ通商ハ爲ニス ル航行ハ年々容易ニナルヲ立證シ其ノ商業上ニ 便ナルヲ確メタリ 同會社ハ學術的ノ調査事 業及運輸業務ヲ併セ經營スルコトニ依リ海面 ノ困難ヲ征服シ去レリ			

一九二八年以降北洋航路委員會ハ北西伯利
 國營株式會社「コムセーグエル」ト呼バル、原則上ハ
 一株式會社ナル運輸ハ産業綜合企業會社ニ
 改編セラレタリ其年以來事業上ニ著シキ變革
 ヲ生ジ該航路ノ廣汎ナル經濟的開發ハ開始セ
 ラル、ト共ニ北部邊境ノ廣汎ナル經濟發展ニ因
 シ幾多ノ手段ガ講ゼラレ「カラ海」貿易ノ取引高
 ハ既ニ一九二九年ニ激増ヲ示シ一九二八年度ノ
 二九三七八セヨリ一躍七三〇ニセニ増加シ又其ノ
 就航船舶數モ一九二八年ノ八隻ニ對シ一九二九年
 ニハ二六隻トナレリ一九三〇年ニ於ケル化學物取引ハ
 一、四四六七三セニ増大シ米船舶數モ四六隻ニ
 及ビタリ

運輸事業ノ隆替ヲトスルニ好適ノ且商業的
 ニ唯一ニシテ最モ確實ナル指數ハ船舶及貨物
 ノ價格ノ歩合ニ依リ徴セラル、保險料ナルガ今
 北洋航路ニ於ケル其、保險料歩合高ノ動態ヲ示
 セバ次ノ如シ

年次	船舶	積荷	船舶	積荷
一九一四	八	六	一	六、五
一九二一	七	五	保險契	約ナシ
一九二二	六、五	三、二五	全右	全右
一九二三	六、〇	三、〇	全右	全右
一九二四	四、七五	二、七五	一、八四	四、二五
一九二五	三、七	一、五	一、七一	一、二五
一九二六	三、七五	一、二五	一、六一	一、二五

一九二六	一八一〇	七三〇〇	一七一二
一九二七	一四一〇	八〇一〇	一四一九二
一九二八	一三一四	七八一〇	一四一三四
一九二九	一三一〇	九一一〇	
一九三〇	一四一七五	一三二一〇	

輸出入ノ載貨噸數間ニ生ジタル関ハ輸入航路ニ
 空荷運賃ヲ現ズルニ至リ一九二九年以降豫材輸出
 ノ船賃ノ昂騰ヲ招ケリ
 茲ニ一言注意ヲ要スルハ北洋航路ト他ノ航路トヲ
 比較スルニ当リテハ「カラ海」運船賃ニハ今日ニ
 至ルマデ他ノ航路ニ於テハ孰レモ國庫ノ負担トセラレ
 化貨物ニハ掛ケラレザル幾多ノ諸掛ノ合マレ居ルコト
 ニ留意スベキコト之ナリ 之等費用トシテ與テ

年別	海	上	河上	備考
一九二一	六〇一〇	一	正確ナル	北洋航路ニ依ル
一九二二	五〇一〇	一	計算不能	輸入商品ノ運送
一九二三	三〇一〇	一	一	貨ハ西部國境經由ノ
一九二四	二〇一〇	一〇〇、〇	三九一六八	運賃ニ均等セシム
一九二五	一九一七	七八五	三二一四〇	

船賃ノ動態モ亦前者ニ方ラズ該航路ニ依ル運輸
 業ノ消長ヲ窺フニ興味アル好資料ナリ

ラルハ、砕氷及航行ノ備役料學的研究事業ニ關スル費用税関事務所測候所ノ費用並ニ積換ノ技術的完備等ニ關スル出費ナリ

北洋航路ガ西伯利―政羅巴聯絡ノ商業上ノ常規ノ確定海運幹線トナリタル證據ハ次ノ事情ニ徴シテ明カナリ即チ該航路開始ノ初年ニ於テハ輸出貨物ノ大部分ハ高價ニシテ運輸シ易キ皮革原料羊毛馬毛剛毛筆ノ西伯利商品ヨリ成リ他ノ經路ニ依リテモ輸出シ得ベキモノナリシモ一九二四年ヲ始メトシ爾來外國市場ニ出スニ他ニ出口ヲ有セザル木材油脂石墨小麥羊毛等ノ商品ノ輸出ヲ開始シ得ルニ至レリ此等商品ガ如何ニ「カラ海」貿易ニ委セラル、カラ知ル爲ニ一九二四年

ヨリ一九二九年ニ至ル間ノ總輸出ニ對スル其ノ%ヲ見レバ左ノ如シ

一九二四年	五二	一九二七年	八七・五
一九二五	六六・七	一九二八	九二・六
一九二六	八五・九	一九二九	九四・五

北洋航路ハ外國市場ヘノ西伯利原料品ノ直接低廉ナル出口ナルト共ニ又西伯利ノ生産力向上ニ充テラル、輸入貨物ノ重要ナル通路ナリ

該航路ノ重要ナルハ尚之ニ止マラズ之ニ依リ爲サル、供給ハ其ノ數量ノミナラズ西伯利市場ニ之等商品ガ着岸スル時々ニツキテモ亦正確ニ計畫的ニ行ハル、莫ヨリスルモ肝要ナリ右ハ西伯利ノ廣汎ナル工業化ニ基リ該地方經濟再建ノ初期ニ於テ

魚鱗	二〇五、四七九	一〇九、九五八	二五、八九六、五二	一四九、一三四
皮革原料	三五七、一九四	三、一〇一、五一六	四、四三、一〇二六	十一、三二九、五、一〇
獸毛	九〇、一九八	一、三四六、二〇五	一、五四一、三、九四	十一、九五一、八九
羊毛	一七四、五一六	一、三九、九、九五	一、六一三、四〇〇	十一、二四三、〇五
計	三九〇、四、一五七	二七、九、九、〇、八七	三、一〇、九、六、八、五	十三、〇九七、五、〇六
木材原料				
松角材	六五四、五七四	七、五七、三、四、五七	一、一五、三、九、三、五	十、九、五、五、八、六
松角材(細)	六九七、七〇	六、九七、七、五、六、八	一、四、三、四、一、七、九、三〇	十七、四〇、四、二、二、四七
松角材(粗)	一六〇、八、八	一、六、四、四、二、九、九	三、三、三、八、五、九、一〇	十一、五九四、三、六、一七
枕木	九四七、五	九、一、一、五、九、九、七	一、八、三、六、六、六、六	八、七、五、〇、五、六、三
枕木	二〇、四、四、六、三	一、七、一、七、六、四、三	四、〇、四、一〇、一、二	二、三、三、三、三、六、八
輸出總計	—	二、六、三、四、四、五、〇	三、八、〇、九、七、〇、三、四、六	十一、六、四、六、二、五、八、九六

特ニ重大ナル意義ヲ帯ビ来ルモノナリ	最後ニ北洋航路ノ通商上ノ特質及他ノ経路ニ比シ其ノ便益ナルコトヲ證スルモノトシテ該海路ト他ノ諸経路中最モ近キ「レーニングラード」港經由ノ鉄道―水路混合路ニ依ル西伯利亞原産地ヨリノ輸出貨物運賃ノ比較ヲ幾手ゲ得	一九二九年「カラ海」貿易ノ總輸出入ノ北洋航路及「レーニングラード」経路ニ依ル總運賃ヲ比較スレバ収表ノ如シ(單位金貨)	数量(單位噸) 北洋航路 經路運賃	数量(單位噸) 北洋航路 經路運賃	数量(單位噸) 北洋航路 經路運賃
輸出	二四六、四三三	一八五、五八、九、五	一八、五、六、二、三、八、二	十	四、一、八、七
油脂	五、四〇、〇	一、五、四、九、八、〇	一、九、〇、三、四、二、〇	十	三、五、二、六、二、〇
機油	七、〇、三、四、七	九、四、四、七、六	四、五、六、四、一、一	一	四、八、八、三、四、九

輸 入				
輸入總計	一二〇四三、三九五	一三五三四、五六二	九七三一四、七五	中一三八〇、三〇、ハセ
輸出入合計	+			
佛 噸 (一〇〇 噸)	一五九四七、五五四	—	—	計一、二六五、九五四、九
スラング (一〇〇 噸)	一八一二四、五〇五	三五一六、八八二	四七、八、八四、五三二	—
北洋航路通運貨物ニ附與サル、特典				十一〇〇四、二三四、〇七
計				二二七〇、九二、一六

該数字ハ金留及外貨建用ニ關シ 河海ノ水運ニ
 ヲリ生ズル全般ノ節約ヲ示セルモノナルガ假リニ
 此ノ金額中ヨリ前記西経路ノ各々ノ海運ニ
 依ル外貨費用ヲ引離シ之ノミ比較スル時ハ少
 ズシモ其ノ結果ハ北洋航路ニ利アリトセザルベシ
 然レ共海上船舶ニモ國產石炭ヲ使用セシムル

年 別	輸 出	輸 入	合 計
一九二一	四八七七	八四四〇	一三三一一七
一九二二	五八三七	七七九〇	一三六二七
一九二三	二四	一〇七六	一、一〇〇
一九二四	四一四八	六五二三	一〇六七一
一九二五	五五八三	七六〇二	一三一八四

コトニヨリ外國石炭ニ對スル對外支拂ヲ縮少
 シ得ベキコト 茲船長等ノ給料及輸入航路ニ於ケル
 船舶ノ空荷航路ノ費用ヲ縮少シ得ベキコトヲ考慮
 ニ入ルレバ北洋航路ノ「レーニングラード」經由線ニ比シ商業
 的ニ優越セルハ益々明瞭ナルベシ 一九二一年ヨリ一
 九二五年ニ至ル總取引貨物積荷高ヲ輸出入別ニ示
 セバ次ノ如シ (單位噸)

一九三〇	一九二九	一九二八	一九二七	一九二六
一八三〇	一七〇七	一六一四	一〇〇七〇	九〇九八
一六二八九	一三一四二	一三三二一	一三三二一	一三三二一
一四四六七	七三二〇	二九三七八	二四四二八	一九一六八
一九三〇年ニハ「カラ海」貿易貨物取扱高ハ一般的 ニ膨張セル外亦海洋船ノ載貨屯數増大ノ莫ニ 成功シタリ即チ一九二九年度「オビ」河上汽船一隻ノ 載貨量ハ二五四九噸ナリシ一九三〇年度ハ二七二 一佛噸即チ前年ノ一〇六％トナレリ更ニ「エニセイ」 河ニ於テハ一九二九年度海洋汽船一隻ノ平均載貨 量ハ二九七七佛噸ナリシガ一九三〇年度ハ三六九二 佛噸即チ前年ニ對シ一三四％トナリ或ル船舶ハ				

續載量 五五〇〇噸ニ達シタルモノモアリ	運輸事業ノ擴張ト若シ北部邊境地方ニ於ケル 工業企業施設事業モ進展シツアリ即チ挽材工 場鑛鑛工場ハ建築中ニシテ「クレイスク」炭坑ハ稼 行ヲ開始シ黒鉛工場亦建設サレツアリ「カラ海」 沿岸ノ産業ハ組織セラレ北部企業ノ爲糧食ノ 根據タルベキ「ソブホース」創設セラレ居リ有要 物探査及西伯利北部並ニ政露ノ將來ノ石炭供給地 タル「トウングス」流域ニ於ケル石炭ノ試掘ニ對シテハ 天々地質調査隊ヲ派遣シ北部「エニセイ」輸出地 ニ於テハ森林調査行ハレツアリ	「コムセー」エルプーチ「會社」在「躍」ハ一九三〇年ニハ「カラ海」 貿易ノ輸出ヲ一九二八年ノ七倍餘ニ増加スルヲ得シメタリ
---------------------	--	--

斯クノ如キ成果ハ問題ヲ正確ニ組織的ニ解決シタル
證據ナリ

不依ノ航行一オムスクーノーウィ・ポルト間往復ニ堪
エ得ル強力ナル必燃機船ノ建造 特ニ「オビレ」下流及
灣ノ航行ニ適スル 鋼鉄製船及外港用貨物船ノ
裝備ハ「オビレ」河ノ三角州ノ北部所謂「マラーヤ・オビレ」
在ル中間積換地「ハレス」プールニ於テ貨物ノ溜置
ヲ爲スコトニ依リ航行期間中ニ「オビレ」イルトサシレ幹
線ニ於テハ二回ノ輸送航行ヲ實現スルヲ得シメタリ
河船ノ二航行ニ付イテノ試ハ一九二九年ニ始メテ行ハレ
タルガ「エニセイ」河ニ於テハ河船ノ三輸送航行ヲ遂ゲ
タルガ之ハ「ニイガルカ」港ガ形勝ノ地位ヲ占ムルガ
故ニシテ全港ノ位置ハ海上積込ヲ輸出原産地方ニ

四〇〇料接近セシメ且ツ貨物ノ迅速且便宜ナル積
換ヲ保證セリ 河船ノ二或ハ三航行ハ同一ノ積載
量ヲ以テ其ノ貨物輸送ヲニ三倍ニ増加セシメ得
タリ然ルニ比シ運送方法ニ於ケル欠点ハ貨物ヲ一時
陸揚スルコトニ依リ生ズル無用ノ費用ナルガ一九三一
年ヨリハ前年ノ作業上ノ欠陥ヲ除キ仁貝物ノ河岸
溜置ヲ爲サズシテ河船ノ三航行ヲ實現行スル豫
定ナリ右實現ノ方法トシテハ木材工業ヲ「ニイガルカ」
ニ興シ其ノ製材ヲ直チニ海上汽船ノ舷側ニ出サ
シムルニアリ 商業的ニ有利ナル木材輸送出ノ實現
ハ西伯利木材輸送工業發展ノ刺激トナルコトモ一
額ニ値ス 旧「クラスノマルスク」及「管」カンスクレ管正ノ若干
工場ハ国内市場向作業ニ加フルニ輸送出向製材ヲ

所有船舶ト備船トノ相互關係變遷表	一九二八年		一九二九年		一九三〇年	
	汽船	非汽船	汽船	非汽船	汽船	非汽船
會社船隊ノ能力	一九〇〇馬力	八七五〇噸	三九三〇馬力	二七三三噸	九五三〇馬力	五一七三八噸
一九二八年ニ對スル	一〇〇	一〇〇	二六二	三一一	六三五	五九一
會社船隊ノ隻數	一	三	三	二	八	三〇
全會社所有船舶ノ最近三年間ニ於ケル増加表						
	一九二八年		一九二九年		一九三〇年	
一九二九年	二	一	五	三	一〇	一〇
一九三〇年	三	一	七	七	一八	一〇
工ニセヨ河	モーター船	汽船	船	河船(橋樑船)	計	
一九二九年	一	一	三	一	四	
一九三〇年	三	一	一〇	六	二〇	

モ行ヒ居ルモ最近一九二六年以來ハ輸出向製材事業業ハ漸次「オビレ」沿岸ニ移リ国内市場向ヨリモ輸出向ノ仕事ニ重ヲ置ク「チウリム」挽材工場ノ如キ建設ヲ見ルニ至レリ一九二九年木材輸出貨物中ニハ「ウラル」産丸太ノ入シ居ルガ「コムセーウエル」會社ハ北部「エニセイ」地方ニ主力ヲ注ギ始メ結果輸出水材貨物ノ膨脹ハ常ニ「エニセイ」河木材運輸ニ從事スル河船船腹ノ不足ヲ訴ヘ居ル有様ナリ					
「コムセーウエル」會社ノ所有及備船河上船隊動態ハ次表ノ如シ					
「コムセーウエル」會社所有船隊ノ構成表					
「オビレ」河	モーター船	汽船	船	貨物船	計

所有船隊	汽船	非汽船	汽船	非汽船	汽船	非汽船
一五〇〇馬力	八七五〇噸	三九三〇馬力	二七二三八噸	九五三〇馬力	五〇七三八噸	
二八六	三三六	五七〇	六五五	七六九	七六六	
三七四〇馬力	一七二三八噸	二九七〇馬力	一四三五五噸	二八七〇馬力	一五八二七噸	
七二四	六六四	四三〇	三四五	二六一	二三四	
五二四〇馬力	二六〇三噸	六九〇馬力	四二五九三噸	一二四〇馬力	六七五五噸	
計						

前表ニ依リテ明サル如ク所有船隊ニ依ル備船能隊ノ代替ハ急テンボヲ以テ行ハレ而モ其ノ一部ハ有カナルモ一ター船ニシテ其ノ優秀ヲ誇ルモノナルコトモ留意スベキナリ

單一指揮ニ置カル、カラ海運船ノ洋方面ノ計畫的組織ハ「カラ海」ノ航海ヲ全然安全ナルモノトセリ

最近「カラ海」ニ於ケル「カラ海」貿易船ノ難破セルヲ聞

カズエトテ普通ノ船路状態タルベキ全條件（設備、燈明等々）ヲ完備セリト云フニ非ズ	船舶ヲシテ「カラ海」航海ヲ容易ナラシムル無線電信、氷船ノ外ニ昨年ハ航行機ノ應援アリテ航行中ノ船舶ニ盡シタルトコロ鮮シナカラザリキ現在ハ一三〇馬力ノ二発動機ヲ備ヘ一五〇料ノ航行区域ヲ有スル航行機三台ガ航空服務ニ多タリ居レリ	北洋航路用ノ爲次ノ諸島ニ無線電信局ヲ設置セラル即チ「ユーゴルスキー・シヤル」「マートチキン・シヤル」「ヴァイガチ」「マルレリヤル」「ノヴィ・ホルト」「ウスタリホルト」「イガルカ」等又「オビ」及「エニセイ」沿岸部ヲ落シハラゲオヲ設備セリ	前記電信局中ノ或モノハ既ニ一九二〇年マデニ建テ
---	--	---	-------------------------

ラレタルモ殆ンド全部新規ニ模様替セラレ
 一遊覽、一部機器、新物ニ取替ヲ見タリ
 正現、安全ナル航海ヲ保障スル爲「カラ海」
 水路參考書ノ發行アリ
 築港無キ爲貨物ノ積込ニ多リ要スル滞船費ハ
 著シク増加ス之ノ狀態ヲ明カニスル爲一例ヲ求ム
 レバ若シ「アルハンゲルスケ」又ハ「フレイングラード」ニ於テハ
 積材一晝夜ノ積込ハ三〇〇スタンダード（一六五噸）ナルニ
 此處ニテハ僅カ九六一〇〇「スタンダード」ニ過ギス
 緩慢ナル貨物積込ハ傭船期間ヲ延長シ爲ニ
 對外支出ヲ増大ス築港設備積込荷揚作
 業ノ機械化並ニ該作業ノ爲十分ナル勞働力
 ヲ備フルコトハ海上船舶ノ積込ヲ最大ニ晝夜ニ

CII

短縮ニ得シム
 海洋船舶ノ傭船ハ（タイムチャーター）呈蒙ニハ百口以上
 ナリシモ一九三〇年ニハ六〇一七〇日トナリ中ニハ傭船期間
 ヲ四六日ニ短縮セルモノアリ今後ノ傭船期間ノ
 短縮ハ無線電信破冰船航行機ノ如キ手段ヲ
 採用シ適當ノ築港工事ヲ施シ積込荷揚作業
 ヲ機械化スルコト等ニ依リ期シ得ベキハ全ク疑ヲ
 容レザル所ナリコノ結果トシテ傭船料ノ増スル限
 リ對外出費ノ一部ヲ軽減シ得ルコトハ北洋航路ヲシテ
 他ノ航路ニ比シ著シク有利ナル立場ニ置カシメルモ
 ノト言ハザルベカラズ
 正現ノ航行ヲ保障スルニ足ルベキ航海施設ノ
 「カラ海」ニ無キ爲海峡及「カラ海」通過ニ精通セル

CII

特別ノ高等船員ノ傭入ヲ爲サザルベカラズ 彼等ノ俸給支出ハ北洋航路ノ利益殺滅ヲ招来スルモノニシテ一九三〇年ニ於テハ貨物一噸ニツキ船長等ノ俸給ノ費用ハ英貨一〇片^{ペンス}ニ相当セリ

外國ヨリ傭船ハ不利益ニシテ之ニ對シテハ巨額ノ外貨支出ヲナシ来レルガ一九三〇年ハ外國海洋船腹借入ニ一三八九英貨磅ヲ要シ僅カ一ニセニ六英貨磅或ハ全傭船料ノ九%ガソウイェト船腹ニ對シテ拂ハレタルナリ 傭入船舶ハ「カラ海」航海ニ適セズ其ノ航行ニハ碎氷作業ヲ要スルトコロ 其ノ維持費用ハ北洋航路利用ノ諸機^{機関}ヲ爲^爲シムモノナリ 其ノ結果結氷ノ如何ニ拘ラズ航行シ得ル特殊船舶ノ建造ガ早速解決ヲ要スル問題トシテ

CII

提出サレ居レリ 斯カル船舶ノ就船ハ碎氷船ノ助ヲ必要トセズ 因ニ碎氷ノ維持費ハ一九三〇年ニ於テハ貨物一噸ニ對シニ留^留ミニ哥^ゴトナリ居レリ

カラ海ニ航行用特殊型ノソウイェト船舶ノ建造ニ敢然着手セザルベカラズ「ソウイェト」船隊ノ創設ハ單ニ外國船傭船費截氷船維持費 船長連ノ俸給等ノ経費ヲ免ガラシムルニ至ルノミナラズ 最も合理的ニ本航路ヲ利用シ得シムモノナリ
「ソウイェト」商船隊創設ノ曉ハ 海洋船舶ニ用フル外國石炭購入上現在避ケ難キ對外支拂ハ消失スルニ至ルベシ 外國石炭購入費ハ「ソウイェト」船隊ノ創設ノ如何ニ拘ラズ減少シ得ベシト雖モ一九三〇年ニ於ケル之が支出ニハ實ニ二八二ハ〇英貨磅ヲ要シタルナリ

CII

海洋船舶ニ西伯利石炭ヲ供給スルコトニ依リ外貨支
出ハ半減サレン

北洋航路ヲ普通ノ航路ノ状態ニ持テ来ラスコトハ
普通保険率ヲ限界ヲ變更シテ更ニ之ヲ東方及
北方ニ擴大スルニ至ルベクコノ限界ノ改正ハ北洋航路
ヲシテ保險ノ莫ニ於テハ他ノ航路ト同一地位ニ立タシ
ムルモノナリ

一九三〇年度海上船舶保險ハ總額三九四一萬貨
磅ヲ要シ貨物一噸ニツキ四志九片ニ至レリ北洋
航路ノ商業的便益ヲ益々利用スル幾多手段中
一九三一年ニハビビン産(ハルマンスク地方)燐灰石ノ西伯利
移入ガ豫定サレ居レリ之ニ依リ船舶ノ空荷航行
ヨリ生ズル費用ハ減少セラルベシ輸入航路ニ在ル

外國船ガハルマンスクレニ寄港スレバ石炭ニ對スル外貨
支出ハ縮少セラル何トナレバ石炭ノ積込ハハルマンスクレ
迄ノ航行ノ計畫ニテ成サレハハルマンスクレニ於テコソライエト
石炭ヲ積込ムガ故ナリ燐灰石一〇〇〇噸ヲ運送スルモノ
ト見テ約一四〇〇萬貨磅ノ外國石炭ヲ節約シ得ル
モノト見得ベシ更ニ該ハルマンスクレニ寄港ニ南联
シテ船長四圍体ノ差遣ヲ除外シ得之ニ依リ節
減シ得ル所ハ四〇〇磅ナリ最後ニハルマンスクレ寄
港ニ依リ船舶ニ十隻ハハルマンスクレ寄港ノ要無キニ至リ
ニニ〇〇磅ニ對スル外貨支出ヲ減ズベシ斯クノ如ク
ハルマンスクレ寄港ハ他ニ種々ノ利益アル外四〇〇〇磅ノ
對外支出ヲ縮少セシムベシ

前述セル處ヲ約スルニ上記各手段ヲ實施スレバ

北洋航路ハ他経路ト同等ノ地位ニ立テ而モ商業的ニハ他ノ孰レニ比シテ最モ有利ナルモノトナルヲ知ルベシ
何故ナラバ航行ニ必要ナル一般條件ヲ欠ケル今日ニ於テモ北洋航路ハ輸出者ニハ巨万ノ利ヲ齎ラシ居レリ更ニ本航路ガ有利ナル修歟態トナリ對外支出防止策ニ関シ何等カノ解決ヲ見ルニ於テハ西伯利ノ輸出ノ爲メ大ナラザル并小細徑（陸運ヲ指ス）ノ如キハ最早問題タラザルベシ

北洋航路ノ重要點ハ今日ニ於テハ全然エラズ定スルヲ得ズ巨額ノ外貨收入ヲ興フル北洋航路ニハ當然從來ニ増シタル注意ガ向ケラズンバ非ズ
今後ノ研究ハ先ヅ水路ノ發展確立並ニ精通ノ方面ニ歩ヲ進メザルベカラズ現在ノ水路利用ハ未ダ十

分ナル程度ニ達シ居ラズ

北洋航路今後ノ設備ノ充實ハ緊急ヲ要スルモノニシテ莫ノ設備中ニハ河上船隊ノ擴充造船所河灣建設（之ガ最適ナル地莫ハントボリスクル及フエニセイスクレ）

河航ノ障害物除去及利用西伯利水系ト歐羅巴ノ水系トノ連絡及海洋船隊ノ鞏固等ヲ推サザルベカラズ「エニセイ」ノ「イガルカ」水道及「オビ」灣ニ於ケル築港ハ全ク必要且緊急ナルモノト認メザルヲ得ズ

「オビ」河口ニ於ケル「ノヴォイボルト」港建設ハ「エニセイ」河ニ比シテ不利ナル自然的條件ノ存在セルガ爲ニ難工事ニシテ且巨費ヲ要スル事業ナルモ（急務）設目錄中ニ記入セラルベキモノナルガ現在ノ設計ニ計算セラレ居ルニローニ五百万留ノ出費モ大ナル「オビ」イルトギシレ流域ニ

貢獻スル所ヲ考フレバ法外ノ巨額ナリト言フベキ場合ニテラズ
 北洋航路ハ單ニ外貨流入ヲ増大スルノミナラズ北部
 至細至ト北部政務間ニ開カルベキ安價ナル對双交通路
 タルベキ凡エル條件ヲ有ス 又國通運ノ貨物トナルモノハ
 石炭穀物燐灰石ナリ 北洋航路ヲ單ニ政路巴ヘノ
 西伯利亞物輸出路タラシムルノミナラズ又國交通路
 タラシムベキハ既ニ一九三一年前途セル燐灰石特送ヲ試ム
 ルコトニ於テ實際ニ着手セル次第ナリ
 北方ノ富源ヲ掌握スルニ基リ其ノ支柱トモナルベキモノ
 従前ノ通り學術的調査事業ノ資料ニシテ此等ハ企
 業營業及其他ノ經濟的活動ノ場所規模及性質
 ヲ決定スル基礎トナルモノナリ
 木材工業、鈦山業、食糧工業等ノ企業ヲ振興スルニ

CII

家畜ノ牛乳ノ野菜同業農業設立ヲ必要トス
 北洋航路ノ隣接地域内ニ北部ノ經濟政治的發展
 ヲ社會主義ノ軌道ニ置リ工業地方ノ出現ヲ見ルベシ
 西伯利亞北部ヲソレ聯邦全國國民經濟工業化ノ重要部
 分トシテ社會主義的工業化ノ道ニ引ナル、北洋航路が
 如何ニ重要ニシテ其ノ目的ニ好適セルカハ言フヲ俟
 タザル所ナリ サレバカラ海ニ迂回スル大北洋航路ノ計
 畫發表者達ト茲ニ論争スルノ必要ヲ認メズ 前述シタ
 ル所ハソレ聯邦經濟ノ社會主義實現ニ及ボス所少
 ナカラザル 西伯利亞輸出ノ他屬ナル通路トシテノ北洋
 航路ノ重要性ヲ充分ニ證明シタルモノト思考ス「北
 洋航路ハ永遠ニ永ニ閉サルサレバ「カラ海ニ經由西
 伯利亞諸河ノ河口ニ至ル商品輸出入ノ海路間通或ハ

CII

發展ノ爲ノ特別設備ニ多大ノ財貨ヲ散ズルガ如キハ
徒費ナリトフボリソフハ揚言セルガ其ノ言が果シテ
眞面目ニ爲サレタルモノトスレバ其ノ無識ハ救フベカラザル
モノナリ

北洋航路ハ開カレ發展シツ、アリ、フカラ海ノ氷ハ料
學ト技術ノ參加ニ依リ征服サレ、フカラ海ノ航行者ハ
最早勇者ニハ非ズ、彼等ハ他ノ海上ヨリモヨリ安樂ニ
感シ居レリ（最近一度ノ特記スベキ難破モ無カリシコトハ
前述シタル通り）北洋航路ハ公平ニ見テ大航路ト言
ハザルヲ得ズ何トナレバ大洋ヲ除キ本航路ニハ三〇〇〇
料ノ船舶行程トニハ〇〇料ノ流送行程ヲ含ムガ故ナリ
北部海高航路ノ建設ハ第一次五ヶ年計畫ノ課
題トセラレザルベカラズ加フルニ今後ノ北洋航路豫定

CII

運送貨物ハ五ヶ年計畫ノ末ニハ五〇〇〇〇噸ニ行々ハ
總合計畫豫定ノ三〇〇〇〇〇噸ニ達セシメザルベカラズ
北洋航路會社五ヶ年計畫書ノ現在ノ出資ハ当面ノ
問題ヲ遂行スルニハ不充分ナレバ之ヲ増加スベキ要アリ
輸出入及國內河海通運路トシテノ北洋航路ヲ構成
スル一部トナルベキ航路線路中第一ニ認メラレザルベカ
ラザルハ、フクズバスレヨリ、ウラルレノ石炭移送ニ便スル
問題解決中ノ一ニ數ヘラル、氷陸混合路ノ一部ヲ形成
スベキ、フタウダリトホリスクリ（ウラルレヤアリ）同航路及毎年
供炭難ヲ告ガ居ル、フクラスノヤルスクリヘ通航ノ汽船ニ石炭
ヲ供スル助トモナル、フトムスクリエニセイスクレ航路ナリ
不自然ニモ、フカラ海ノ利用ヲ避ケン、トスルタリノ北洋
航路ノ設計ハ今日何等ノ根據モ有セザルモノナリ

CII

將來ノ北部幹線ハ、殆ンド無制限ノ通運力ヲ有スル也
洋航路將來ノ發展ノ爲メナル刺戟トナリ、北部移住ヲ
旺ンニシ、輸出原産地ヲ「カラ海」港灣ニ接近セシメ
現ニ出現シツ、アル北部産業地方中ヨリ有カナル工業
中心地ヲ出スニ至ルベシ

(ジズ・シビリ誌ヨリ)

本信寫送附先

在「ソ」聯邦大使

CH

F-0069

在オデッサ日本領事館

在オデッサ帝國領事館

オデッサ港ノ海運

昭和七年四月

分類 五、一、五〇、六

本信寫送付先

在露大使

本件ニ關スル調書別紙ノ通竝ニ報告申進ス

「オデッサ」港ノ海運ニ關スル件

外務大臣 芳澤 謙吉 殿

領事 田中文一



在オデッサ

昭和七年四月六日

公第三五號

米局

第一

記録件名

冬、航行、状況、報告、後、送、入

昭和七年四月廿五日接

正副通

BI (記)

オデッサ港ノ海運

一	「ソ」聯邦商港トシテノ「オデッサ」ノ位置	一	頁數
二	「オデッサ」港出入船舶	三	
三	航路別	五	
(一)	小沿岸貿易	九	
(二)	大沿岸貿易	一三	
(三)	外國航路	一五	
◎	「ソウエト」汽船航路	一七	
◎	外國船	二〇	
一	伊國船	二一	

在オデッサ日本領事館

二	英國船	二六
三	獨逸船	二七
四	希臘船	二八
五	米國船	二九
六	諸威船	三〇
七	其他ノ外國船	三一

(以上)

在オデッサ日本領事館

「オデッサ」港ノ海運

一、「ソ」聯邦商港トシテノ「オデッサ」ノ位置

「オデッサ」港ハ戰前一九一三年ニ於テハ出入貨物ノ總量ニ於テ「レニングラド」「バクウ」「アストラハン」ニ次ク第四位、外國貿易ニ於テハ「レニングラド」ニ次ク第二位、外國輸出穀物量ニ於テハ「ニコラエフ」「ロストフ」ニ次ク第三位ヲ占メ黑海諸港中ノ第一ノ良港ナリシカ戰後及内亂後振ハス「ソウエト」國民經濟ノ變化ニ依リ變轉シ一九二七―八年度ニハ出入貨物ノ總量ニ於テ第七位、外國輸出入貨物數量ニ於テ第六位ニ落チ出入船舶ノ數ニ於テ第三位

在オデッサ日本領事館

其噸數ニ於テ第五位、外國航路ノ出入船舶ノ數ニ於テ第六位、其噸數ニ於テ第五位トナリ黑海ニ於テモ「バツウム」「ノウオロシイスク」ノ次位ニ落チタリ

將來ノ「オデッサ」ハ商港出入内外貨物總量ニ於テハ一九三三年ニ於テ第八位、一九三七年ニハ第十位トナル豫定ナリ

現在ニ於ケル「オデッサ」港ハ近東、中東及地中海方面トノ旅客船ノ連絡地、露國製品ノ對近東輸出港、植民地產物ノ輸入港並ニ黑海ニ於ケル商船部本部ノ所在地ニシテ大沿岸貿易港及客船出入ノ主要港ナリ

在オデッサ日本領事館

三 「オデッサ」港出入船舶

「オデッサ」港出入船舶数及其輸送貨客ハ左ノ如シ（單位千噸及千人）

	一九二八年		一九二九年		一九三〇年	
	入	出	入	出	入	出
出入港	三二二八	三二四六	四〇五七	四〇七三	三七四九	三七四九
隻數	八五九三	八六二九	一二四五七	一二七〇五	一二二七二	一二二七二
登簿噸數	七七四	七三四	九三九	八四六	一八二〇	一八二〇
旅客	三二一七	五四三一	四二六四	八四三七	一三七五二	一三七五二
貨物						

在オデッサ日本領事館

3

	一九三一年		一九一三年	
	入	出	入	出
入	三七三二	三八五〇	三八五五	三七二二
出	二二一三七	二二一八六	二四二五五	二二七二
噸數	一七四〇	二〇五七	二四二五五	二二七二
旅客	一、二二八二	一、五五六八	一、四一〇九	一、一〇六九
貨物				

右ノ如ク最近四年間ハ船舶ノ數及噸數ニ於テモ將又貨客ノ數量ニ於テモ年々増加シツ、アルカ戰前ノ狀態ニハ未タ遠ク及ハス

一九三一年ニ於ケル船舶數ハ戰前ニ對シ出港五三九%、入港五三一%、其噸數六八四%及六八六%、輸送貨物七三七%及六八四%ナルカ此十八年間ニ船舶ノ増大セルコト及貨物噸數同様ニ増加シ殊ニ輸出貨物カ増加セルコトハ注意スヘキ點ナリ

在オデッサ日本領事館

4

三 航 路 別

右出入港船舶及輸送貨客ヲ沿岸貿易及外國航路ノ航路別ニ付テ示セ
ハ左ノ如シ

小沿岸貿易	出 港				入 港			
	隻	登録出数 十噸	旅客 千人	貨物 十噸	隻	登録出数 十噸	旅客 千人	貨物 十噸
一九一三年	六四九〇	一八九〇		四八四	六三七七	一八六五〇		一四二二三
一九二八年	三〇三七	四九六六	七五七	一一一六	三〇三一	四七六八	七〇九	三四九三
一九二九年	三八三九	八二九七	八九〇	一五九九	三八三三	八〇九九	八七七	六四八九
一九三〇年	三三三七	二四五〇	一七八一	二八一	三二七一	一七五四	一七三三	九四九九

在オデッサ日本領事館

5

(二) 大沿岸貿易

(三) 外國航路

大沿岸貿易	出 港				入 港			
	隻	千噸	旅客 千人	貨物 千噸	隻	千噸	旅客 千人	貨物 千噸
一九一三年	四九	九八〇	一七〇	三三	六九〇	六七八		
一九二八年	八	二九二	一	二〇一	一二二	七四		
一九二九年	七	一八九	〇	一六八	二三四	一三七		
一九三〇年	一二	三六五	〇	五〇五	一六五	四〇		
一九三一年	一七	四六六	〇	五九七	二〇四	一九七		

在オデッサ日本領事館

6

(一) 小沿岸貿易

昨一九三一年ノ小沿岸貿易船ノ狀況ヲ見ルニ之ヲ船種別ニシテ前年ト比較スレハ左ノ如シ(單位旅客千人、數量千噸)

出 港	一九三一年				一九三〇年			
	隻	噸數	旅客	貨物	隻	噸數	旅客	貨物
外國汽船	一一	三三一	一	一	一一	二九一	一	一
露國汽船	九〇九	一二五二二	二六七	三二一五	九〇七	一二五九	一	一
帆船	二七〇	三〇三	〇	七七	二二七	一七六〇	一	一
曳船	一三八	三九二	一	三〇八	一七二	一七六〇	一	一
計	三四二三	一三五四八	二六七	三四九三	三三二七	二四五〇	一七八〇	二八二八

在オデッサ日本領事館

入 港

外國汽船	一二	三六九	一	八五八	一一	二九一	一	六四四
露國汽船	八九八	一二五四六	二四	九六六	八五五	一	一	一
帆船	二三四八	三〇一	一	二九四	二二九	一七三二	一	一
曳船	一四一	三八四	一	一七四	一五六	一七三二	一	一
計	三三九九	一三六〇一	二四七	一〇九四三	三三二一	一七四四	一七三二	九四九

一九三一年ノ出港船舶數ハ三四二三隻ニシテ前年ニ比シ九十六隻、十萬九千八百噸多ク右ハ露國汽船及帆船ノ増加ニ依ルモノニシテ曳船ハ前年ヨリ三十四隻ノ減少ナリ其輸送旅客數ハ三萬八千七百八人即チ一七八%餘、貨物ハ六萬七千五百噸即チ二三九%ノ増加ニシテ内

在オデッサ日本領事館

國船ニ依ルモノナリ
 出港外國船ハ全部汽船ニシテ空船又ハ貨物ノ積込ヲナサスシテ他港
 ニ向ヘルモノナルカ内伊國船九隻、二萬六千一百噸（前年八十一隻
 二萬九千噸）英、諸各一隻アリ
 入港船舶ニ付テハ一九三一年ハ三三九隻、百三十六萬噸ニシテ前
 年ニ比シ百二十八隻、八萬五千六百噸ノ増加ナルカ右ハ主トシテ露
 國汽船及帆船ノ増加ニ依ルモノニシテ曳船ハ減少セリ其輸送旅客ハ
 二十萬四千六百人弱ニシテ前年ニ比シ三萬一千四百人強即チ一三三
 %増、貨物ハ百九萬四千三百噸弱ニシテ前年ニ比シ十四萬四千三百
 噸即チ一五二%弱ノ増加ナリ右ノ内外國船ノ移入セルモノニ於テ二
 萬一千四百噸ヲ含ム

在オデッサ日本領事館

當港ハ「ソウエト」商船部黒海本部ノ所在地トシテ内外航路ノ起點
 ナルカ當港出入内國航路中定期線ハ重要ナルモノナルカ其航路左ノ
 如シ
 一、「オデッサ」―「バツウム」間黒海高架索線
 イ「エクスプレス」線 一週四回 夏期ハ其上二回増發ス
 使用船「クルイム」―「グルジャ」型（登簿噸數四千七百
 噸「モーターボート」）六隻（内一九三一年夏及秋ニ各
 一隻就航）
 ロ 旅客貨物線 一週二回
 ハ 旅客線 一週一回
 ニ「オデッサ」―「ニコラエフ」線 三日一回
 ミ「オデッサ」―「ヘルソン」線 同 右

在オデッサ日本領事館

右二線ハ「モーター」船「コトフスキイ」「モルダビヤ」(姉妹船各一千百九十噸)ヲ交互ニ配船ス但シ結氷期間休航ス
右ノ外石油運送船ノ入港年百回以上ニ達ス

(二) 大沿岸貿易

黒海ト「バルチック」海又ハ極東ノ自國諸港トノ航路ニ當ル所謂大沿岸貿易ハ最近年々進展シツ、アルカ右船舶ハ汽船ニシテ一九三一年ノ出港英國船三隻(九四二九噸、貨物一八〇〇一噸)日本船一隻(四二五九噸、貨物七九二噸)(右四隻共極東行鹽積載)ヲ除ケハ總テ露國船ナリ

大沿岸貿易ハ一九二九年ノ異狀アリタル外其船舶及貨物ニ於テモ年

在オデッサ日本領事館

13

々増加シ居ルモ一九三一年ノ分戰前ニ比スレハ大體其三分ノ一ナリ
本航路ハ左ノ如シ

一、 黒海―浦潮線

約毎月一回

「トランスバルト」「デカプリスト」「ウオロフスキイ」等
七千噸以上ノ貨物船ヲ使用ス

二、 黒海―バルチック海線 二週一回

漢堡、「リバープール」等ニ寄港シ黒海ニテハ「オデッサ」
「ノウオロシイスク」「パツウム」ニハ必ス寄港ス

但シ前記表ニ見ル如ク本航路ハ豫定ノ如ク實行セラレ居ラス

在オデッサ日本領事館

14

(三) 外國航路

外國航路ノ出入船舶及貨物ハ年々増加シツ、アルカ一九三一年ノ一九一三年ニ對スル割合ヲ全般ノ出入船舶ト外國航路ノ夫ト對照スレハ左ノ如シ

	全般	外國航路
船舶數	五三七 %	五七五 %
登簿噸數	六八五	六五四
貨物	七一・一	七一・四

外國航路ノ船舶ヲ露國船及外國船ニ分テ觀察スルニ其入港船舶ニ關スルモノ左ノ如シ

在オデッサ日本領事館

船舶數

	露國船	外國船	計
一九一三年	三四四	四九八	八四二
一九三一年	一一三	三三六	四四九

登簿噸數(千噸)

	一九一三年	一九三一年
登簿噸數	五三〇・九	一、〇六九・一
	一九九・三	八四五・七
		一、〇四五

即チ外國航路ニ於ケル露國船ノ地位ハ戰前一九一三年ニ於テハ船舶數ニ於テハ四〇・八%ナリシカ一九三一年ニハ二五・一%ニシテ其登簿噸數ニ付テハ一九一三年ニハ三三・二%ナリシカ一九三一年ニ於テハ一九%ニシテ未タ振ハサルモノアリ

在オデッサ日本領事館

外國航路ノ出入露國船舶ハ左ノ如シ（單位千噸、及千人）

	出 港				入 港			
	隻數	噸數	旅客	貨物	隻數	噸數	旅客	貨物
一九二八年	七〇	一二八七	五七五	七一〇	三一	七九〇	一四	八六〇
一九二九年	八〇	一三七四	六六七	七六六	九八	一六三	二〇	九七一
一九三〇年	九四	一七四二	八六五	九一三	八二	四四三	〇七	一二五八
一九三一年	七八	一三一	九六	七九〇	一一	三一九	九	三〇八一

一九三一年ハ輸出貨物ノミ増加セル外他ハ前年ニ比シ減退セリ

◎ 「ソウエト」汽船ノ航路

一 近東線 二週一回

在オデッサ日本領事館

17

「オデッサ」― 披土塞― 「アレクサンドリヤ」間往復
寄港地 「スタンブウル」「サロニカ」（往航）「スミルナ」「ビレイ」

二 「アナトリヤ」線 一月三回

三 南波斯線（貨物船） 定期

南波斯線ハ一九二八年五月十三日開始、同年中汽船四隻、登簿噸數一萬一千六百噸、輸出貨物五千五百噸出港シ一九二九年七隻、登簿噸數約一萬七千三百噸、輸出貨物一萬三千五百噸、一九三〇年ハ五月迄ニ五隻、登簿噸數一萬一千九百噸、輸出貨物一萬噸出港セリ
右輸出貨物ハ砂糖及綿布ヲ主トス復航ハ途中各港ニ於テ棉花其他所謂植民地貨物ヲ輸入セリ

在オデッサ日本領事館

18

本航路ハ一九三一年秋ヨリ年末迄ニ四回定期シ「オデッサ」ヲ發シ
 汽船「サモエド」「ツイリヤニン」「ツルクメン」ノ三隻ヲ使用シ
 寄港地ハ「ドベダ」「ホディダ」「アバス」「ブシル」「モハメラ」
 「バストラ」トセルカ一九三二年ニハ年十二回、使用汽船昨秋通り
 寄港地ハ右ノ外坡土塞「アレクサンドリヤ」「スタンブウル」ヲ増
 加セリ
 四 「オデッサ」ー「ジェノア」ー馬耳塞線
 不定期ノ貨物船航路ニシテ大體一ヶ月二回ノ豫定ニシテ一九三〇
 年以來新造冷蔵船「ドネブル」(三〇七〇噸)「ドネストル」(三
 五八〇噸)ヲ使用シタルカ本年ハ新造ノ「モーター」船六千噸
 ノ「ウォルガ」「ネワ」「クウバン」ノ三隻及本年五月就航スヘ

在オデッサ日本領事館

キ「リオン」ヲ使用スル豫定ナリ

◎ 外 國 船

外國船ハ「ソウエト」ノ貿易カ毎年發達スルニ伴ヒ其船舶カ同様程
 度ニ増加セサルト一九三〇年ノ豐作ニ依リ穀物ノ外國輸出ノ激増セ
 ルヲ以テ同年秋ヨリ翌年春ニ掛ケ大ニ増加セリ當港出入ノ内外各航
 路ノ外國船ハ左ノ如シ(單位千噸)

	出 港		入 港		
	隻數	噸數	隻數	噸數	貨物
一九二八年	一一三	二〇四八	一〇九	一九七九	九九四
一九二九年	一三一	二五九六	一三八	二七五〇	八四九

在オデッサ日本領事館

一九三〇年	三二七八〇八五	九七七〇	三三一八〇八三二一三五
一九三一年	三四七八七九四	一〇九四六	三四八八八三七二六、〇

當港出入ノ外國船ニ付以下各國別ニ觀察セントス

一、伊 國 船

伊太利ハ舊來當方面ト地理的及經濟的位置ニ依リ相當密接ノ關係ヲ有シ露國產穀物ノ好買手トシテ其船舶ノ來往頻繁ナリシカ歐洲大戰ノ結果埃國「トリエスト」附近ヲ占領シ同地ニ本店ヲ有シ當方面ニ活動セル船會社「ロイド、トリエスチノ」ノ航路ヲ繼承シ同國ノ航海獎勵策ト相俟テ益々發展シ今ヤ當港出入外國船中第一位ヲ占ムルニ至レリ

伊太利ハ當港ニ對シ一九三一年中左ノ定期航路ヲ有セリ

在オデッサ日本領事館

(一) 「ロイド、トリエスチノ」會社

イ 東方線B「トリエスト」ー「オデツサ」間往復 二週一回

「ヴェニス」 「ヒューメ」 「ブリンジシ」 「サンチカラント」 「コルフ」 「ビレイ」 「スミルナ」 「ミチレン」 「サロニカ」 「スタンプウル」 「ブルガス」 「ワルナ」 「コンスタンツァ」寄港

本航路ハ下半期ヨリ「エゲエ」黒海線ト稱シ「オデツサ」ヨリ黒海東岸諸港及土耳其諸港經由「スタンプウル」ニ出ルコト、ナレリ

ロ 「エゲエ」黒海線A

本航路ハ「トリエスト」 「パツウム」間往復ナリシカ一九

四週一回

在オデッサ日本領事館

三一年下半年期ヨリ東方線Bト改稱シ「パツウム」ヨリ「ノウ
オロシイスク」ニ延長シ夫ヨリ「オデツサ」ニ回り「コンス
タンツア」「ワルナ」「ブルガス」「スタンブウル」ノ經路
ヲトルコト、シ航海數ヲ二週一回トセリ

右兩線トモ旅客ヲ有ス

(二) 「セルウイチ、マリチミ」會社

本會社ハ六、七年前ヨリ月一回位ニ「オデツサ」「ノウオロシイ
スク」「パツウム」其他ノ諸港ニ寄港セルカ一九三一年ヨリ定期
航路トシ四週一回トシ三千噸級汽船三隻ヲ使用セリ

(三) 「ジェノア」汽船會社

一九三一年二月以來二週一回、三隻ノ汽船ヲ配屬セシメ「オデツ

在オデツサ日本領事館

23

サ」外黒海諸港、伊太利西海岸諸港間ニ定期航路ヲ開設セリ

右四定期航路ハ一九三二年ニ至リ伊太利ニ於ケル船會社カ二大合同
トナリ當方面ニハ「ロイド、トリエスチノ」「マリチマ、イタリア
ナ」及「シトマル」ノ三會社合同シ「ロイド、トリエスチノ」會社
トナリ本年上半期ノ航路トシテ

(一) 「アドリヤチック」黒海定期線A

「トリエスト」ー「オデツサ」間往復 二週一回

寄港地ハ前年上半期ノ「ロイド、トリエスチノ」會社ノ航路ト
同様

(二) 「チレン」黒海船A

「ジェノア」ー「オデツサ」間往復 四週一回

在オデツサ日本領事館

24

出 港				入 港			
年	隻数	噸数	貨物	年	隻数	噸数	貨物
一九二八年	一七	三九八	二八二	一九二八年	一六	三七五	五〇八
一九二九年	二二	五六七	四八二	一九二九年	二三	五九九	三五四

ニ、英 國 船

戰前一九一三年ニハ英國船ノ當港入港數一九五隻、四四三、二〇〇噸
ニシテ入港外國船ノ第一位ヲ占メタルカ最近ハ第二位トナレリ（單
位千噸）

年	隻数	噸数	貨物	年	隻数	噸数	貨物
一九三一年	一一	二九一	一	一九三一年	一一	二九一	六四三
一九三二年	九	二六一	一	一九三二年	九	二六一	六二二

在オデッサ日本領事館

26

出 港				入 港			
年	隻数	噸数	旅客人	年	隻数	噸数	旅客人
一九三一年	五一	九七五	一五三	一九三一年	七五	一二九八	一〇二二
一九三二年	五八	一一五〇	二三四	一九三二年	六〇	一二〇六	一七一三
一九三三年	一〇	二二五四	一三四	一九三三年	八	一九五〇	一三六

寄港地「コンスタンツァ」「ワルナ」「ブルガス」「スタン
ブウル」「ビレイ」「ネアポリ」「マルセイユ」
右定期航路ノ外「ソウエト」側ニ傭船セラレタルモノモ年々増加シ
タリ

當港出入伊國船ノ數及貨物量ハ左ノ如シ（單位千噸）●

在オデッサ日本領事館

25

一九三〇年	五三	一四五四	二五五九	五四	一四五四	四七六
一九三一年	六三	一八八〇	三一六一	六三	一八八八	四九九
内						
小沿岸貿易	一	三四	一	一	三四	七〇
大沿岸貿易	三	九四	一八〇	一	一	一

一九三一年ノ出港英國船中大沿岸貿易ノ三隻ハ傭船セラレ空船ニテ入港シ鹽ヲ積載シテ極東ニ向ヒタルモノナリ

三 獨逸船

最近當港出入港ノ獨逸船中重ナルモノハ獨逸東方線ノ諸船ナルカ右ハ定期ヲ止メ其優秀ナル組織ヲ利用シテ貨物ノ相當數量アルニ於テハ直ニ回船スルコトニ依リ益々其成績ヲ擧ケツ、アリ

(單位千噸)

在オデッサ日本領事館

	出 港			入 港		
	隻數	噸數	貨物	隻數	噸數	貨物
一九一三年	一三	二四〇	二三二	四八	九〇七	
一九二八年	一七	二九〇	三二六	一三	二四〇	二七
一九二九年	一七	二九〇	三二六	一八	三二一	二九
一九三〇年	三三	六五五	九二六	三三	六五五	一
一九三一年	四三	九〇一	一〇五四	四二	八七五	二一三

四 希臘船

昨年以來希臘船ハ其低廉ナル價格ニ依リ「ソウエト」側殊ニ穀物輸出期ノ傭船界ニ大ニ進出セリ(單位千噸)

在オデッサ日本領事館

出 港	入 港	六 諾 威 船			出 港	入 港
		噸數	隻數	噸數		
諾威船モ一九三〇年ノ穀物輸出期ノ傭船ニ依リ激増シタリ（單位千噸）		一九三一年	一五	五二、三	一九三一年	一五
		一九三〇年	二三	八五、五	一九三〇年	二三
		一九二九年	五	一七、五	一九二九年	五
		一九二八年	一	一	一九二八年	一
		一九三一年	一五	五二、三	一九三一年	一五
		一九三〇年	二三	八五、五	一九三〇年	二三
		一九二九年	五	一七、五	一九二九年	五
		一九二八年	一	一	一九二八年	一
		一九三一年	一五	五二、三	一九三一年	一五
		一九三〇年	二三	八五、五	一九三〇年	二三
		一九二九年	五	一七、五	一九二九年	五
		一九二八年	一	一	一九二八年	一

在オデッサ日本領事館

30

出 港	入 港	五 米 國 船			出 港	入 港
		噸數	隻數	噸數		
米國船ハ戰前殆ント見ルニ足ルモノナカリシカ最近「ソウエト」側購入ノ農業機械及其他ノ機械類ノ輸入ニ當リ「ユーロピヤン、エキスポー、ライン」ノ船舶大部分ヲ占ム（單位千噸）		一九三一年	六四	一三、七五	一九三一年	六二
		一九三〇年	八九	二〇、三四	一九三〇年	八九
		一九二九年	九	一六、〇	一九二九年	一二
		一九二八年	一二	一七、五	一九二八年	一〇
		一九三一年	六四	一三、七五	一九三一年	六二
		一九三〇年	八九	二〇、三四	一九三〇年	八九
		一九二九年	九	一六、〇	一九二九年	一二
		一九二八年	一二	一七、五	一九二八年	一〇
		一九三一年	六四	一三、七五	一九三一年	六二
		一九三〇年	八九	二〇、三四	一九三〇年	八九
		一九二九年	九	一六、〇	一九二九年	一二
		一九二八年	一二	一七、五	一九二八年	一〇

在オデッサ日本領事館

29

F-0069

0:00

▲佛 國	一九一三年	二	三	二六	五六〇	一	
	一九二九年	二	三〇	二二	三〇		
	一九三〇年	二	四八	〇二	四八	〇一	
	▲丁 抹						
▲和 蘭	一九二八年	五	一、〇	三六	九〇	七二	
	一九三〇年	三	六六	六五	七八	一〇	
	一九三一年	八	一三二	一三八	一六九	八五	
		隻數	噸數	貨物	出 港		
		隻數	噸數	貨物	入 港		

在オデッサ日本領事館

32

一九一三年	二	四六	一	二	一六八	三一
一九二八年	二	四六	一	二	四六	三一
一九二九年	三	六〇	六六	三	六〇	三八
一九三〇年	七	一七七	一〇四	七	一七七	九五
一九三一年	二〇	五八九	四八二	一九	五五一	二九九
外ニ 小沿岸貿易	一	三六	一	二	七四	一七六
隻數						
噸數						
貨物						
隻數						
噸數						
貨物						

七 其他ノ外國船

其他ノ外國船ノ出入數及其輸出入貨物左ノ如シ（單位千噸）

在オデッサ日本領事館

在オデッサ日本領事館

31

F-0069

0:00

在オデッサ日本領事館

	▲芬 蘭	一九三〇年	一	二九	一四	一	二九	一
	▲瑞 典	一九三一一年	一	三四	二〇	一	三四	一
		一九三一一年	二	五六	一	二	五六	八四

(以上)

34

在オデッサ日本領事館

一九三〇年	一九三一年	土耳其	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	日本	一九三一年	白耳義	一九三一年
廿一	一	一〇	九	一二	五	一	一	一	一	一
六〇	三二	五〇	三三	八六	五三	四三	四〇	四〇	四〇	四〇
九一	七六	三四	四〇	八四	五三	七八	一	一	一	一
二	一	九	一〇	一二	五	一	一	一	一	一
五九	三二	四五	三七	九〇	五三	四三	四〇	四〇	四〇	四〇
一	一	一二	一	二六	一	一	一	一	一	一

33

進
費

分類 左 1526)

歐米局

通商局長
普通第二五七號

昭和七年七月十五日

在浦潮斯德

總領事 山口

爲太郎



外務大臣伯爵 内 田 康 哉 殿

極東地方就航「ソ」聯邦船舶表送付ノ件

「ソ」聯邦極東地方ハ年々自己産業ノ爲多數船舶ヲ必要トシ特ニ北
洋漁業ノ爲多數ノ本邦船ヲ傭船シ來リタル處、最近一、兩年來ハ著
シク減少ノ傾向ヲ示セリ、右ハ外國ヨリ船舶ヲ購入スルト共ニ他方
歐露方面ヨリ銳意配船シタル結果ニシテ昨年來四十七隻ヲ増加セリ

在浦潮日本總領事館

別紙添附

昭和七年七月廿五日接覽

ト報セサル、別添船舶表ハ當館調査ニ係ル極東方面ニ就航スル「ソ」
聯邦船舶及參考事項ヲ記載シタルモノニシテ未タ充分ナラサルモ
判明ノ分ノミ何等御參考迄送付ス

本信字送付先 在ソ大使

在浦潮日本總領事館

極東方面就航「ソ」聯邦船舶名簿（一九三二年七月）

船名	總噸數	登簿噸數	デットウェイト	貨物積載量	備考
1 アストラハン	二、六九二	二、五一二	四七〇	一、七〇〇	旅客定員三四〇名 一九一三年建造
2 エリワン	全上	"	"	"	同型、
3 トムスク	"	"	"	"	"
4 シンフエロポリ	"	"	"	"	"
5 スタウロポリ	一、二一〇	六八六	四〇〇	九〇〇	旅客定員一八二名 一九〇七年建造
6 インジギルカ	二、三三六	四二二	八〇〇	二、二〇〇	定員三八〇名 一八八九年建造
7 プリモリエ	一、四四九	九〇七	七五〇	一、三〇〇	定員一二八名
8 モングガイ	九九三	五九三	三〇〇	一、〇〇〇	定員二二六名
9 コルイマ	一、五二八	九一五	〇六五	一、六四三	定員二四四名 一九〇六年建造
10 トボリスク	二、七五一	一、六三〇	四七〇	二、四〇〇	定員六四七名

11 テオドルネツテ	二、六一九	一、四〇〇	三、一五五	二、〇〇〇	定員五四四名
12 ジェリヤボフ	六五四	三五五	三五〇	二四六	定員三一三名
13 クレチエト	二、三二五	一、五〇一	八〇〇	八八五	定員六七三名 黒海ヨリ移管
14 ソヴィエト	二、七六三	一、五八八	二、五〇〇	二、二〇〇	定員三四四名 「バルチック」ヨリ移管
15 ヴィユーガ	七二二	三三四	五二〇	二四二	定員三〇〇名 「ボシエツト」定期運航
16 カザツク、ハバロフ	六七九	三五六	四二五	一八〇	定員二〇〇名 砕氷船型
17 スメリチャツク	二四〇	一三五	二五〇	一二〇	定員五八名
18 グリゴリ、ジノヴィエフ	三、三一〇	一、三一〇	三、五〇〇	三、一〇〇	木材運送用
19 タワーリシチ、クラシン	三、三一〇	一、三一〇	三、五〇〇	三、一〇〇	全上
20 ウアツラフ、ウオロフスキ	一、四七九	三、二六七	二、七九三	〇、一七五	全上
21 イテリメン	六、八五七	四、三六八	一、四〇〇	五、〇〇〇	貨物船、元「獨逸船」 浦津オデッサ間三ヶ月
22 デカブリスト	七、三六三	四、一六〇	一、二五〇	〇、三八五	一、運航、黒海所管

70	第六、ラズウエドチツク	
69	アリバトロス	
68	カムチヤツトカ	三、七五〇
67	フセウオロード、シビルツエフ	
66	コリヤーク	
65	ユカギール	
64	ツングース	
63	ラムート	
62	ギリヤーク	
61	第五、チラボロフ	
60	第四、クラボロフ	
59	第三、クラボロフ	四、二四八

六、七八〇

試	元日本船	給水船	蟹工船	蟹工船	元米國船	元米國船	元米國船	元米國船	元米國船	蟹工船	蟹工船	元日本船
"	漁船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船

58	第二、クラボロフ	五、七四二
57	第一、クラボロフ	四、三〇〇
56	第二、スナブジエネツ	四、〇七四
55	第一、スナブジエネツ	八、二八
54	エスキモス	
53	オロチヨン	約四、〇〇〇
52	アリヨール	三、四六二
51	エリドラード	一、二一一
50	ヤクト	約四、〇〇〇
49	ウォルナ	約八、〇〇〇
48	モンゴル	
47	カムチヤダル	約三、五〇〇

四、九四一、二〇〇

元英船	全上船	元米國船	蟹工船	一九一八年建造	元英船	一九〇五年建造	元日本船第十一神盛丸	汽船
-----	-----	------	-----	---------	-----	---------	------------	----

111 110 109 108 107
ボ ス フ オ ー ル
ボ イ キ ー
リ ュ ー ネ ッ ト
ス ラ ウ ヤ ン カ
デ オ ミ ー ド

一六七
一二〇馬力
一一五

全 上
全 上
全 上
全 上

小 蒸 汽 (碎 氷 曳 船)

106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95
ボ ガ ツ イ リ
リ ト ケ
カ ザ ツ ク 、 ボ ヤ ル コ フ
ダ ウ イ ド プ
ド ー ブ ル イ ニ ヤ 、 ニ キ ー チ チ
モ ロ ト
セ ル プ
ソ ュ ー ス 、 ゴ ル ノ 、 ラ ボ ー チ フ
エ ン バ ネ フ チ
ウ イ ン ガ
ソ ュ ー ス メ タ リ ス ト フ
ソ フ ネ フ チ

約 一〇、〇〇〇
" " " "
" " " "
九 八 〇 五 二 〇 一 一 〇 〇 一 一 〇 〇 五 〇
全 上
四 〇 〇 〇 馬 力
二、〇〇〇馬力
七、〇〇〇馬力
一六七

石 油 運 送 船
" " " "
" " " "
石 油 船 型 ナ レ ド
他 ニ 轉 用 ス
全 上
碎 氷 船
全 上
全 上
北 洋 行
小 蒸 汽 (碎 氷 曳 船)

13

公
信
案

承

文書課發送

昭和七年八月

淨書



正格
(原稿)

(淨書)

主 管
通 商
局

任主

第二課

年
七月
廿八日
庚戌

通二
普通

第二二三〇號

大正

昭和七年八月貳日

附
屬
書

通

受信

垂

信老花

管册長

發信

二、通商口岸

人名

農林省 田水產局長

人名

一、

件名

極東地方就航して聯邦船舶
兼三國スル件

名 込
是禮系

本件ニ關シ今般在蒲潮山口總領アリ別紙寫ノ

通報アリタルニ付爲御參考右茲ニ送付ス

(昭和七年七月十五日附在~~海~~總務館來~~往~~普

第二五七號寫並附屬書寫

公
信
案

外務省

2

51

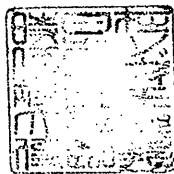
昭和八年九月十六日接

公第四五〇號

昭和七年十二月二十二日

在「ソヴィエト」聯邦

臨時代理大使 天 羽 英



外務大臣伯爵 内 田 康 哉 殿

北水洋諸港及浦潮間定期航路ノ組織

ニ關シ報告ノ件

當國學術探險隊ノ北水洋調査就中同方面ニ於ケル航路ノ探究ハ近年其ノ成績大イニ見ルヘキモノアリテ現ニ本年七月下旬「アルハンゲルスク」ヲ出發セル碎氷船「シビリヤ」カ三ヶ月ニシテ一舉北水洋ノ横斷ニ成功シ著シク世上ノ注目ヲ惹キタル次第ハ本年十月十

在ソヴィエト聯邦日本大使館

八日附公第三八九號通信ヲ以テ及報告置キタル處北水洋方面航路ノ開拓ト相俟ツテ當國ニ於テハ極地向碎氷船隊ノ充實ノ必要生シ豫テ「ソヴィエト」商船隊ヲシテ右船舶ヲ責任アル各造船所ニ注文建造セシメツツアリシカ本月十五日ノ「イズヴェスチヤ」紙報道ニ依レハ前記商船隊ノ丁抹ニ注文セル碎氷船ハ愈々來春竣工ノ運ヒトナリタル由ニテ本件ニ關シ商船隊長代理「ロマノフ」ハ「イズヴェスチヤ」社員ニ對シ左ノ通り語レル趣ナリ

極地沿岸ノ征服ハ近年著シク成功シ茲ニ極地定期航路ノ擴張並極地沿岸住民ヘノ定期「サーヴィス」及同地方富源ノ可及的利用ノ問題起リ而シテ極地ニ於ケル活動ノ擴大ニ伴ヒ「ソヴィエト」商船隊ハ極地航海用船舶ノ増加ヲ必要トスルニ至レリ
依而「ソヴィエト」商船隊ハ責任アル各造船所ニ於テ船舶ノ建造ヲナスト共ニ極地航海ニ充ツヘキ特別船舶ヲ丁抹ニ注文シタリ
同船ハ目下「コペンハーゲン」近傍「ブルミストル、ライン」造船所ノ建造中ニ屬シ主要材料ニ鋼鐵ヲ用キ、積載總量三千二百屯、

在ソヴィエト聯邦日本大使館

F-0069

0207

機關ハ蒸汽「ピストン」式ニヨリ壓力指數二千四百ヲ算シ、時速
十二、五哩ニシテ乘客收容力ハ軟席二十五、硬席七十五ヲ有ス
同船ハ極地航海ノ特性及過去ニ於ケル經驗ヲ考慮シテ建造セラ
レ本質ニ於テ他ノ船舶ト趣ヲ異ニス即海水ノ一定硬度以上ノ氷結
ヲ必要トシ大ナル積載力ト廣キ行動範圍トヲ有シ炭水ノ補給ヲ受
ケスシテ八千哩ヲ突破シ得ヘシ
同船ハ一九三三年五月竣工ノ豫定ニシテ竣工後ハ丁抹ヨリ浦潮ニ
廻航シ専ラ太平洋沿岸用船トシテ浦潮——「コルイマ」「レナ」
河口及「ウランゲル」島間ノ定期極地航路並極地探險ニ使用セラ
ルル筈ナリ云々

右報告ス

在ソヴィエト聯邦日本大使館

公	信	案
天羽代理大使ヨリ別紙寄、如ク報告有之 二付石佛等御参考迄送付ス 本信達付先海軍次官、通信次官 在川大使館来七等十二月二十日附公第百五号第一添		
外	務	省

要部二部 F. 1. 50. 6		文書課長 文書課發送 昭和八年壹月廿日發送済 淨書 正校(原稿) 昭和八年一月十八日起草	
主 管 歐米局長 主 任 第二課長		海軍次官 通信次官	
名 件 北水洋諸港及浦潮固定期航路二箇之件		名 人 信 受 有田外務次官	
本件ニ関シテ本年一月十八日附欧一合普通第一三三号 ヲ以テ通報致置タル今般更ニ在ソコエシ聯邦		名 件 録 記	
公 信 案		外 務 省	

19 75

F-0069

0209